り獨逸でなければならぬが、獨逸は東洋に於て全く勢力なく、且つ東洋の海上を防備するには濠洲、加奈陀の國防策を完成すれば、强ち日本に依賴するの必要なく、隨つて日英同盟の鞏固な礎は段々と搖いては來ぬかと思はれる次第である。

五　結　論

故にこれ等の問題を如何に處するかといふに支那に於ける日英關係問題に就いては、英國の楊子江流域、日英利權の範圍に就て協定し、双方の活動より生ずる軋轢を避くることが必要と信ずる、次に濠洲人が日本人に對する疑惑の念を晴らすといふことである、日本人が濠洲に對して移民を送りて所謂「平和的侵入」をやる考へもなければ濠洲を占領しやうといふ野心もない日本人の意思を濠洲人に通ずることが出來ずに、その在官の政治家にさへ分つて居らぬから、種々の悶着が起つてくるのである。故に充分に日本の眞意を濠洲人に諒解させることが必要である。殊に戰後日濠貿易の增進して居る折から、この意思疎通は經濟的にも多大の効果があることは疑ふべくもない。

唯國際關係の自然的成り行き如何によつては日英同盟といふことが協商といふことになることを思はなければならない。例へ條約の文面、形式は現在の儘であつても、實質がさう傾きはせぬかと憂慮せざるを得ないのである。

結局の處、我國は實力を養成せねば駄目である。實力あつて始めて敵としても同盟としても重きをなすのである。單に陸海軍のみでなく工業力も財力も充實させねばならぬ。而して決して他に依賴することなく自己の實力に依賴する決心と準備が必要である。かゝる有樣になつて始めて日英同盟の上に重きをなすことゝ思ふ。

◎戰後英國の國防問題

英國の國防問題殊に戰後に於ての國防問題は、その勢力の强大なだけ大に注意す可き價値がある。今軍政家として有名なるガーディナー氏の戰國の英國々防を紹介して見やう。

戰後英帝國改造の諸問題を論ずるは尙早く國防問題に於て殊に然りである。問題の要素たる內國關係の點だけには推測を下し、建設的議論を構成すべき粗生原料はある。我輩の取扱ふべき諸

要素は知れて居り、究竟の目的も定まつて居るけれども苟も戰後の國防政策なる大問題を定めんには、汎く內外に亘つて觀測を下さねばならぬ、即ち單に英帝國各部の双互關係、若くは英帝國と我が聯合國との關係のみならず、更に世界戰後の解決法に亘つて考察せねばならぬのであるが此れは今未定である。

世界が今日經驗しつゝある所を顧みれば其の戰後再び舊時の競爭角逐狀態に復歸するを欲せざるべき事だけは想像し得らるゝのである。文明國が悲慘なる現戰爭に訴ふるに至りし所以を思へば、今日まで世界を維持し來つた仕組は已に朽廢瓦解して用に立たぬといふことが知れる。我輩が將來人類を一體とした世界的社會を建設せんと欲せば、之を堅確に支持し得る新しき基礎を見出さねばならぬ。文明と蠻行とは兩立し能はざるといふことは疑なきことで、米國に基を發し、英國グレー卿並に世界の經世家及び智者の多くが贊成した平和促成同盟會といふ大運動の起つたのも此の故である。斯る理想を實現するは容易でない、事の前途には各種の大困難大障碍あるは勿論であつて、現に戰爭を以て人類社會の不可滅物と思惟する一派の人々は既に此の運動の空想的なるを冷笑して居るのであるが。然かしこの歐洲戰爭何時か終結して各國はその損益勘定を精査することゝなる曉は戰爭を以て無上の良藥と思惟する戰爭贊信者も漸時その數を減じ、世界の常識は現戰爭の再起を豫防すべき何等かの共同手段を要求し主張せんは疑ひない所である。

凡て此の如き豫防方法の實行を期せんには、英帝國は啻に同情を寄するのみならず、その國防組織を整頓して之が實行に適せしむる如くなすが緊要である。假に此の如き廣汎なる世界的問題は姑く措き、英帝國が一國としての國防政策を定めんにも、廣く眼界を開豁して、現戰爭の國際關係上に及ぼすべき諸結果、即ち將來の講和條件、敵味方に對して取るべき我が態度、英帝國各部の相互關係等を考量せざるべからざるは何人も異議なき所である。予はこの趣意を以て英帝國々防の大體を觀察して見やう、此れは必ずしも予一家の發明と云ふべからざるは勿論である。

一　英國の國防問題は要するに海軍問題なり

戰後英帝國の立場を察するに、殊に重大視すべき事實が若干ある。その第一は我輩は世界の各方面に屬領を有する島國人民といふことである。この事實は我國の國防が古來常に他國と回一なるを得なんだ基因である。世界に一國として英帝國と同一の特質を有する國はない。獨逸、露西

亞、米國は共に自體に一大國をなすから、國防問題の主たるものは陸軍問題であつた、今後とも永久爾かあらねばならむ。海上權はその死活問題でない、海上權の獲取がその軍備の目的となりしことが有つたにしても、それは一國の安全を主とするものに非ずして膨脹を主としたるものである、即ち其の防禦力を堅固にする爲でない、其の攻擊力を強大となすが趣意であつた。我輩の立場は之に反して、海上權は島國人民としての生存、又各英語國民の一政治團體としての存立に死活的關係のある問題である。一言に云はゞ攻略の具でなくして、自衛の具である。之なくんば英帝國は疾くに土崩瓦解して仕舞つて、各自植民地も、印度も、外敵の侵入を防ぐ爲め銘々適當な方法を講せざるを得ざることゝなつたに違ひない。ヂスレリーは嘗て植民地を以て一個の厄介物と論じたが、今日では我國に左樣な見解を取るものはなく、各植民地としても亦自らそれを以て居るものではない。現戰爭は英帝國各部の强力と目的との一致とを事實上に證明して居る。此の各部一個の帝國的聯合として維持するといふことは今日英帝國各部の一時主張する所である。過去と此聯合を支持するの基礎となつたものはこの海軍である、將來は一層此迄に重きを置かねばならぬ。

現戰爭の經驗が我が海上權問題に如何なる影響を及ぼすべきかは、今日では尙ほ明瞭なる概念を定むることは不可能であるけれど、その影響の重大なるべきことだけは疑ひない所である。戰爭前には我國の海軍問題は大艦主義に集中して居て、我輩の思考する所、談ずる所は皆努級戰艦のことのみであつた。大艦主義は戰後も尙ほ勢力を失はざることであらうが、然かし戰爭前と同一程度に在ることは必ず有るまいと思ふ。現戰爭に海戰上の大事實として突然現出したものは潛水艇である。潛水艇が將來大艦主義を廢滅せしむるに至るべきや否やは今日に於て尙豫言しにくいが、海軍の防禦力及び攻擊力なる問題に根本的變化を加へしむるに至るべきは專門家の議論一致する所である。而してその變化の工合は今日迄現れた所のみを以て云ふも、決して我國にとつて有利な方でない。

予は前年某海軍大官と潛水艇問題を論じた時、其人は斯う云つた。一切の海軍兵器と等しく、潛水艇は强大海軍の補助として用ふれば一層その海軍の威力を發揮せしむることが出來ると言つた。其人は今日も尙潛水艇をかく輕く見て居るかは疑問以上である。此の潛水艇の發現に由て、海戰上に神秘不可測の一元素が加はつたのである、潛水艇の前には大艦巨船も無い、大戰艦は大

いにその運動を殺がれた。商船に至つては殊に附け狙はるゝ所である。此の結果現戰爭では大海軍國も小海軍國も殆んど差別なきものとなつた、今日の經驗を以てすれば將來の海軍力は艦船の多少を標準とすべからざる如くである。我輩が過去に於いて海上權として恃んだものは今日以後殆んど意義を有せぬことになりはせまいか、小海軍國と雖も潛水艇の建設に精力を集中するに於ては世界の最大海軍國を敵として最も畏るべき打擊を加へ得ることも有り得るのである。

此の事は英帝國々防上の海軍問題に深甚なる影響を與ふべきは明白である。戰爭前各自植民地には英本國海軍との關係に就き久しい間議論があつた、即ち各植民地は軍艦を英本國海軍に寄與すべきか、或は自ら建造して自ら守るべきかといふが其の要點であつて、新西蘭は前說に決定し濠洲は後說を主張し、加奈陀は現戰爭開始當時には尙未決定であつた。古來の海軍戰法より論ずれば海軍は之を統一して一單位となす方が正しく有利であることは、現戰爭の經驗に由ても明瞭であると思ふ。北海は策戰の單位である、英帝國は利益の單位である、濠洲防禦上の弱點は今日の戰爭に見ゆるが如く、濠洲領海でなくして北海である、南阿弗利加とても同樣である。そこで海軍は一單位となし共同監督の下に之を動かすといふことは今日の事態より來る當然の歸結と見て宜からう。或は本國に海軍を集中すると同時に、各自植民地へもその海軍費に貢獻するの報酬として一種の巡回小艦隊を派遣すべしといふ如き說をなすものもあるが、此れは愚論である。艦隊は固定物でない、水路の通ずる所は何處へも輸送せしむることが出來る、英帝國を防禦するのに其の根據地を太西洋に置かず太平洋に置かざるべからざる場合有りとすれば、其れは自由である。

然かし海戰上に潛水艇なる不可測の新要素が加はれる上は海軍政策の最善基礎に關する見解にも著しく變更せしむるに至るであらう。海軍の戰略及び部署の問題の總て之が爲に變化を受くるのみならず、政治上の見解をも變化せしむることあるべきは當然である。何となれば各植民地の帝國に從屬するといふ裏面には利己的な動機も潛み居るからである。植民地の精神同情の淺からぬは疑ふまでもないが、萬一分離を促す實際問題起る場合に此の同情がよく之に打ち克ち得るかは疑問である。精神的同情は統合の時よりも分離の時に於て反つて大なることがある。今日智利には西班牙の傳說に對する同情は昔し智利が西班牙の暴政の下にあつた時よりも却つて篤いのである。其れは別論であるが、現在新西蘭、濠洲、南亞弗利加、加奈陀、各植民地が起つて英帝國の

爲に參戰すといふも畢竟自衛の一手段に外ならぬ。そこで此等が他日自力を以て有効に自衛し得る器械を握ることある曉は、英帝國防衛問題に變化を起さしむるやうなことはあるまいか。潜水艇即ちその器械となるかも知れぬ。潜水艇が今後愈々有力なる武器となり、海軍戰策を決定するの最有力要素となるやうなことゝならば、從來大戰艦の不可敗的優勢を基礎として考案せられた海軍防禦法も、根本から破壞するといふやうなことがないとも限られぬ。但しこれは眞の臆測である。我輩の見得る限りでは戰後海軍は一箇の單位となりて共同監督の下に行動するといふ方針が愈々鞏固を加ふることは疑ないやうに見ゆる。

二　陸上の防備

陸上防禦の問題になると、此れは全く趣が違ふ。戰前の傾向及び戰爭中の經驗より看るに、將來各自植民地は自ら陸軍政策を立て、自家の所見に從つて問題を決定せんと欲するは疑ひない。今日世間には英本國及び各自植民地を代表せしむる帝國議會の開設を主張する聲が熾んである。戰後英帝國の改造は誠に緊要であるが、此の帝國議會が改造法としての良策であるかは大問題である。何れにしても陸軍問題を定むるには帝國議會は不適當である。若し帝國議會が一致の政策を定めて、濠洲、加奈陀若くは南阿弗利加に向て其の各箇若くは數箇が贊成せざる所を强行せんと欲すれば、帝國の分裂は必然である。陸軍問題に就ては各植民地に自營權を與へ、帝國全體の利害を參酌して之を行はしむべきである、決して帝國の權力を以て之を强制するは不可である。

そこで我國の陸軍問題は海軍問題とは根本から違つて居るのである。現戰爭前我陸軍政策の根本顧慮たりしものは二つあつた。一は消極的で一は積極的である。第一に我國防は海軍を主として、チャタムの言へるが如く、英國の常備軍は海軍であつた。海軍が國防の第一線、第二線、第三線を形成し而して我國は劃然と歐洲大陸戰爭の範圍外に立ち、若し大陸戰爭の場合、何等かの勢力を加へざるべからざる必要ありとせばそれは唯我が優越なる海上權のみを以て行ふ、大陸的規模の陸軍を常備するは我が海軍力を減殺し國家の禍敗を來たすの端であるといふ事であつた。眞に常備軍といふべきは印度であつた。凡て我が海外屬領の防禦に對しては臨時必要に應じて軍隊を編成するがその方針であつた。そこで印度軍と海外遠征軍とは我陸軍政策の二要素と爲り、この外最近に地方軍隊を編成して專ら內地の防禦に充てることゝした。以上我が國防政策は大體

に於て當を得たるものである。戰後に於ける我が立場を考察するに同じく陸軍を置く必要あり、就中最も考量すべきは印度である、印度の防禦といへば依然として常職陸軍常設の必要といふことになる。唯此れに就ては改良すべき點がある事詳細に亘れど、例へば勤務條件の改良である。今日兵役を常職として陸軍に服役するものは決して昔日のやうに單に軍事を悅び勇を衒ふが爲ではない、物質的顧慮があるのである。次にその將校である、その陸軍と國家との關係を視ること偏狹固陋、非民主的で、殊に高級將校中には自ら一種の閥族を持つて居る形迹がある。これは近年に於て屢々見受くる所であつた。そこで今後將校を養成するには從前よりも一層學問才能あつて能く軍事に堪ゆるのみならず、新氣象を注入して軍閥の驕傲心を去り、英國々民の氣質識見を理解し具備せしむるやうに教育すべきである。

三　平和の時代も大陸に參與せよ

扨て戰後尙各種の事情は我國に常職陸軍を置くの必要あらしむるとせば、これより當然來るべき歸結は何であるか、我輩は現戰爭の結果我が存亡の一必要件として大陸に行はるゝ如き徵兵獄度を採用しなければならぬのであるか。從來徵兵制度を主張した者は曰く、現戰爭の經驗はこの主張の至當なりしを證明した、將來には必ず徵兵制度を採用せねばならぬと。今日迄の經驗が其說の眞理なるを證明したと云ふに就ては大に疑問の餘地があるが、然かし何れにも徵兵問題は國務問題の首眼たるものでない。假に徵兵制度は我國存立の一必要條件とすれば我輩は實際に亘つて巨細に當否を審究せねばならぬ。先づ論旨を明かにする爲に心得ねばならぬことは我輩の主として考量すべき點は戰後も戰前に於ける如く、我國は攻防兩つながら海軍を主とすべしといふことである。即ち陸軍を主とせぬのである。光榮ある孤立の時代は既に過ぎ去つて我輩は大陸の紛爭渦中より超然たらんと欲するも不可能なることは、此れは勿論である。我輩は更に平和の時に於ても大陸の事に參與するが宜いと思ふ。孰れにしても今後我輩は歐洲大陸の政局外に超然たることは不可能なるは言ふまでもない事であるから、陸海の防備は必要であるが、此の場合戰爭の忘るべからざるは我國は島國である、海上聯絡に由つて生存する帝國の中心である、海上權が生命の源であるといふことである。此點は即ち我國が大陸各國と立場を異にする所であつて、大陸各國の主要は陸地境界線を防禦するにあつて海上は其生存條件ではないのである。或は又我國が聯

合國中最も準備を缺けりとして自ら我國防政策を攻擊する者がある。これは最も誤つた觀測である。軍事上より云ふても聯合國中最も準備あるものは我が英國であつた。我が本來の行動範圍内たる海軍に於て我國優勢を保ちつゝあることは古來何時の戰爭にも見ざる所であつて、全勝合國は此の我國の優勢を保つ蔭に由つて其國の安全を保つことが出來る。若しこの戰爭に由つて決定的教訓を與へたものは何ぞと問はゞ、それは何よりも海上權である。我輩は將來の國防計畫を定むるに當つては、我國は島國である、海上權の優越は絕對條件であることを忘れてはならぬ。我國の海上權の優越を妨ぐるが如き計畫は一切排除せねばならぬ。

戰前に於て實際上の理由より徵兵制度に最も激烈に反對したものは海軍々人であつた。その言ふ所を以てすれば、一國には國防に充つべき資金には限度がある。一面には優越なる海軍を保ち一面には大陸的規模の陸軍を蓄ふることは一國資力の許さゞる所であるといふに在つた。然かしこれも誤つた考へであつた。現戰爭は我國の資力が防禦費を支出して無限であることを證明しつゝある。但し無限といふのは空想であるにしても、現在我輩は國内に蓄積せる富を以て戰爭一切の經費を支辨して不足に苦まぬのである。玆に於て更に演繹し得る所の一の結論は我國の信用即ち財力である。現戰爭今日迄は經驗より大雜把なる結論を求むれば、寡くとも以上の二に歸する。即ち我國の海上權が開戰の初めより聯合國の主義主張を救護したといふことゝ、我國の信用が聯合國をして今日迄戰爭を繼續せしめつゝあるといふことである。この二は誰も爭ふ能はざる所である。若し我國に此の二が無くんば戰爭は早くも半年も經たぬ中に終り、獨逸は今日頃は戰勝の目的を達して歐洲に覇權を揮ひつゝあることであらう。海上權と信用との重要なることは新事實でも何でもない。ナポレオンも己れの失敗を英國の信用と艦船の衆多とに歸したのである。而して信用の重要なることの明確に證明せられたことは今日の戰爭に於けるが如きことは昔にないのである。戰爭の規模が擴大するに從つて、信用の重要なることは幾何級數的に增大して來た。戰場に於ける將卒の戰鬪もその第二義である。各國は一切の心力を凝らしてこの死活的勢力を集むることに沒頭し、食料、衣服、兵器の材料、輸出貿易の材料を生產することに勞苦し、而してそれが軍事上の强力及び持久力の一源泉となりつゝある。國家は人民あれば一朝にして之を兵卒となすことが出來るけれども、若し平生に商工業の資源へ無盡の信用を貯へ置かぬと、一朝大戰爭に對して之を急造することは出來ぬ。英國が現戰爭の進行に對し全力を集中するに暇取つたのは、

兵卒の缺乏故でない。我輩は現に三箇月にして兵卒を造り得たのである、唯に軍需品の供給である、資源は如何に豐富にせよ、三箇月や六箇月や、若くは一年では如何に我生産能力を盡すとも大戰爭の必需品を供給することは不可能である。此の戰爭に於て一箇の天啓たるは人民にして敎育あらば速かに之を變じて勇氣あり、紀律あり、堅忍力ある各兵科の兵卒を造り得るといふことである。獨逸をして大失望をなさしめ、過去の兵營傳說に大打擊を加へしめたるのも此の事實である。國民に人と信用とあらば武國たるの二要素は具はるのである。國家は必らずしも平生人民をして兵營生活を營ましむるを要せぬのである。

四　徵兵制度を論ず

果して然らば徵兵制度の如きは國防上の根本的要件と云ふべからざるは明白であつて、我輩の解決すべき問題は、我輩は優勢の海軍、大陸的規模の陸軍、我國の信用を同時に併有し得るかと云ふ事である。戰場には此れは可能であると唱へられたのであるが、戰後も果して左樣であり得るか。我輩は現戰爭の爲に莫大の國債を起した、その額はグラッドストーン一代の每年經常費よりも數層倍超過して居る。戰局終結となるまでには國民の負擔額は二億磅に達し戰後恩給等を合算すれば、國庫總支出額五億磅に上るであらう。戰後年々この莫大の經費を支辨し、又戰爭中失つた所の世界市場を回收せんには、國民は古來經驗せざる精力を揮ひ身心を勞苦して產業の興隆に奮勉せねばならぬのである。この最大危機の時に於て我國の人力を不生產的溝渠に投じ、國民の精力を產業界より撤去するは我國の信用に致命的打擊を加ふるものではあるまいか。人力の負擔と同時に財政上の負擔をも增大せしめんと欲するには、我が商業上の立場は破滅するのみならず、我が潛在的陸軍力も消化せざるを得ざることゝなる。

徵兵制度に就ては尙可否を云ふべきものもあるが、國防上我輩の服膺すべき眞の敎訓は、人民をして各々市民たる義務を全うせしむる爲め肉體上及び精神上より國民の人的材料としての價値を增すことである。我輩にして好標準の市民を養成することが出來たならば、國家緩急の際、軍事的材料の不足に苦しむやうなことはない。此れは徵兵制度の邦國でも承認する所である。現戰爭の始め暗殺せられ、歐洲に於いて開戰以來この上無き損害となつたジョーレ氏の「新陸軍」はこの理を闡明した大著である。ジョーレ氏は非陸軍論者であるが、然かも歐洲今日の狀態を以てし

ては、佛國の如き境界線を有する邦國には徴兵制度は必要であると云ひ、同時に氏は舊徴兵制度の傳說に反對して、兵營生活の有害、服役年限の長くして產業界より人を引去り、之が爲に生ずる時間材料の浪費等を指點し、大陸端西の市民兵制度を賛成して居る。此の制度は二箇月間市民を召集して基本的軍事教育を行ひ、爾後毎年十四日間召集訓練するがその制度の大眼目と思ふ。氏は長期の兵役を務めた陸軍のみが有効なる陸軍であるといふ世界一般の見解を痛烈に攻擊して一國の眞の陸軍は市民からなる陸軍である、戰爭術の基本に就て少しばかり教育して置けば有事の日は之を召集して有効なる武器となし得るといふ、別語を以て云はゞ、面倒な軍隊教練を加ふるが有効なる市民を造るの一資格なりとするの說を排斥するのである。この見解の正確なることは現戰爭で充分證明された。英國は最もその適例である。軍事上の豫備教育無き數十萬、數百萬の壯丁を徴募し、僅かに數週間訓練を加へて戰場に派遣する。其れが美事なる働をしてゐる、良兵とは必ずしも兵營生活をなし、若くは長期の軍事教育を受けた者に限らぬ、肉體精神兩ながら健全なる發育をなしたものは皆兵として有力であることを證明して居る。我輩は今後少年の教育法に注意を加へ、最善の教育を施し、體格精神の良好なる發達を遂げしむべきである、然らば國家有事の日には、出して國家の安全を托するに足るのである、國家を守るの最良基礎となさしめ得るのである。言ふまでもなく此れは必ず國民皆兵が其の趣旨であらねばならぬ。即ち我將來の一大急務は我が少年に愛國奉公の觀念、高等なる紀律の習慣、共同生存の義務を養成すべきである。此の國民皆兵とは單に兵役に就くことのみと思つてはならぬ。兵としての服役も其の一部である、國家必要の際には一命を抛つといふこともその一部であるが、然かし眞の動機は平生共存團體の爲めに生き、聰明なる一人前の市民となつて建設的事業に從事するといふ事であらねばならぬ。この教育を行ふには紀律の養成、肉體上の訓練を以て第一の目的とせねばならぬ。この第二は自由社會が健全なる生存をなして行く根本の條件であるが故である。能くこの政策を遂行するに於ては軍事上の目的をも達し得て、必ずしも平生壯丁を强制して兵營に入れ、軍役に服事し非常の苦痛を受けしむるには及ばぬ、又國民は之が爲に過大の租稅を負擔し、一國の生產力及び信用を阻害減殺するに至らぬ、實にこれは愚である。我國の地方軍制度及び少年斥候隊制度も之を改良擴張すれば、この急需を充たすに足る。之を要するに平生に於て有効なる一人前の市民を作り、人生百般の事に義務責任を負ふの觀念を注入し、國家の安寧は己等の手中に在りとの自覺

心を養成するが緊要である。人民をして決して殺伐軟弱の精神を陶冶せしむるに及ばず、一人前の市民といふ高尚なる志操を養成するが緊要である。一國の強力は決して軍服を着けた軍人の衆多なることでない、人的材料の豐潤、有事の日國民が使用し得る處の財務上及び精神上の資源の豐富である。現戰爭は既に此の理を證明して居る。

聯合軍不振の大原因

戰爭なるものは各國相互の政治上の位置より生ずるものであるから、政略と戰略とは最も密接な關係を有して居るものである。かの補給、運輸、船舶、人員的資源の配分、外交等一として政略と戰略とに密接な關係を有して居らぬものはない。しかし大體戰爭といふものゝ眞の目的は戰ふて敵に勝つといふのであるから、戰爭を爲す上には是非とも政略と戰略とこの間に嚴然たる區劃を爲すことが肝要である。若しこの政略と戰略とに嚴然たる區別を存せざるに於ては悔を後日に殘すといふことを這次歐洲大戰に遺憾なき範を示してゐるのである。

かの聯合軍が獨墺側に比して兵力にせよ、物資的にせよ、遙に優つてゐるにも拘はらず屢々獨の猛襲に惱されて戰況不振の狀態を演じて居るのは何故であらうか、聯合軍側が衆を恃み利器に據るに反し、獨軍が强大なる肉の力を恃み、旺盛なる士氣を以て果敢猛烈に戰鬪を遂行しつゝあるといふことも或はその一原因を爲して居ることであらうが、それよりも聯合軍側の協同作戰が不調和にして協同を缺き不統一であつたこと及び動もすれば政略が戰略に干涉して之を制壓し、戰に勝つといふ眞の目的を忘却せしめたといふのが大原因を爲して居るのである。今內外の戰史を遡つて左に其二三の例證を擧げてみれば、先づ日本に於ける最もよき例はかの南北朝時代の楠正成の戰死と南朝沒落の悲劇である。延元元年五月足利尊氏既に九州を定め大軍を率ひ海陸二道より旗鼓堂々と東上した時、新田義貞、警を聞いて播摩より兵庫に退きて之を防止せんとし、一方急を京師に告げた。この時主上この急報に接し楠正成を召され、正成の戰略を聞し召された。楠氏形勢の非なるを見て、聖駕を山門に行幸あらせられ、敵を畿內に入れて、糧道を絕たんことを奏上したが諸公卿楠氏の策を用ひず、殊に參議淸忠等は、敵と一戰をも交へず退却するは皇威に拘はるといふのでこの策を斥けた。即ち素人が武將の戰略を斥けたので、この結果湊川に於ける悲壯な敗戰となり、楠公は遂に幽鬼と化し、南風再び競はず遂に沒落の悲運に陷つてしまつた

のである。これ實に世上大士の周知の事實である。

佛國に於ける實例は、かの普佛戰爭の際、マクマホン軍が獨逸軍の爲にメッツに包圍せらるゝや當時の形勢は要塞をしてなるべく敵を阻止させ、早く敵と互角の兵力を集中して敵を撃破しなければならなかつたのに、當時ナポレオン三世は佛國の輿論に制せられて、遂にシャロン軍を以てメッツ救援の爲めシャロンを進發するに至つた。固より此の考案は軍事上の要求とは正反對のものであつたが、これは獨逸軍に大なる失策のあつた時にのみ効を奏するもので、その他の場合には甚だ危險な策であつた。それでこの結果シャロンの全軍はセダンに扼止包圍され、皇帝ナポレオン三世以下全軍降伏となり、城下の盟を結ぶの屈辱を蒙つたのである。

歐洲大戰に於ける聯合軍不振の實例を今から大略言つてみやう。大戰勃發當初獨軍が白國及びルクセンブルグ方面に襲來するだらうといふのが佛國軍人の豫想であつた、然るに佛國の輿論は盲目的に南方アルサス、ローレンに主力を集中して之れを奪回させやうとした、そしてそれは同一州に於て一歩も早く進入して先陣の功を誇らうといふ考であつた。それで佛軍のアルサス、ローレンに進入するや佛國の新聞は筆を揃へてアルサス、ローレンの恢復目睫の間にありと特筆大書して之を鼓舞したが、一方獨逸は泰然自若その國境監視兵を後退させて、鼠輩の獅子に惡戯をするを顧みないといふ風であつたが、八月初旬行進開始の準備成るや、嚴を碎く狂瀾の谷に決するやうな勢で、恰も疾風の枯葉を捲くが如く、一瞬にして白國方面より佛軍を席捲した。而して八月三日の夜獨軍は白國境を踏破しリユッチッヒ要塞の攻撃に着手したので、愈々獨軍は白國及びルクセンブルグ方面に前進してくることが確實になつた。それで佛蘭西は撃破された白國を救援する必要があるので、こゝで始めて最初の集中計畫を變更して八月十日より兵力の主力を佛白國境方面に移し、八月二十二日より攻勢に轉じムーズ河畔に於て獨軍と衝突したが、獨軍の爲に機先を制せられた佛軍は忽ち優勢なる獨軍の猛襲に會ひ敗戰するに至つた。そこで佛國は漸く政略の戰略に干渉するの不可を悟り、國家の運命を擧げて名將軍ジョッフルに一任することにした。ジョッフル將軍こゝで大果斷を以て北佛一體の沃野を棄ててヴエルダン、巴里の兩要塞に退却し茲に新鋭を養ひ然る後攻勢に轉ずることにした。そして後マルヌ河畔の大雪辱戰となつたのである。當時佛國民北佛の沃地を棄つるを肯せなかつたなら、英佛兩軍主力が退却途中に於て獨軍に捕獲されて全滅することは火を睹るよりも明瞭であつた。ジョッフル將軍の果斷は勿論、之を信

賴して疑はなかつた佛國民の襟度も亦この戰勝の最大原因をなして居るものといはなければならぬ。然るに一千九百十七年春期總攻擊に於て佛軍總司令官ニーベル將軍は金鐵のやうな意志を以て獨軍を突破せんとして、四月上旬主力を以てエーヌ河畔に於て獨軍を攻擊したが、その死傷の大なりし爲、直ちに議會の問題となつてその得る所失ふ所を償はぬといふので、この戰役に參加したニベール將軍を始めその他の軍司令官は皆罷免された。戰爭を爲すに死傷の生ずるのは當然の事であつて、その多少に依つて直ちに高等統帥部の地位を動搖させるやうでは、とても斷乎たる作戰指導で邦家休戚の運命を定むることは出來ない。マルヌに大勝を博した佛國民は既にその勝利の秘訣「將帥への信賴」を忘れてしまつたのである。

これより先き一千九百十六年末、ジョッフル將軍も元帥に昇進して最高軍事顧問官といふ美名の下に佛國總司令官を去り、その快刀亂麻を斷つの概ある將軍の英腕は空しく閑地に祭りこまれてしまつた。こんなことは我國民にはどうしても了解の出來ぬ所である。佛國民はジョッフル將軍を呼ぶにゼチラル、ジョッフルを以てせず、ペール、ジョッフルを以てするので、即ちペールとは父といふことで、かく敬しく遠ざくる主義を採るのは佛國民の眞意であるか、我輩は大いに疑はざるを得ない。

昨年十月伊軍大敗の原因は伊軍が斷乎たる意志に乏しかつた結果である。始め伊軍は聯合國と協約して五月若くは十月始めに於て、イゾンゾ正面に對し攻勢を採ることを約せしに拘はらず、この時に至つて曖昧な理由の下に中止したのである。そこで伊軍援助の爲多數の重砲を率ひて來てゐた英佛軍は大いに伊軍の不徹底的な態度に憤慨して、その大部分は撤退してゐた所に、獨墺軍が攻勢に轉じて、伊軍のイゾンゾ正面に殺到して來たので、遂に潰滅してしまつたのである。即ち斷乎たる意思に缺けるはその戰鬪に於て勝算なきことは這次歐洲の大戰が屢々證明して居る所である、かくの如きは吾人が大いに精査攻究して邦家將來を誤らざるやうにせねばならぬ。

而してこの政略が戰略に干涉するのが戰敗の原因となるといふことに就ては、英國が最もその弊害が多いのである。今日までの英軍の作戰は決して吾人の賞讃し能はざるものである。

政治家萬能主義の英國民には作戰上の信條が理解することが出來ないので、開戰後の作戰上の失敗は多くこゝにその原因を發生せしめてゐるのである。由來英國は立憲政治の模範國として、我政治家中にもその崇拜者が少なくないが、英國統帥權の所在に至つては頗る不明瞭である。今

度の大戰亂に於て英國政治機關の弊害が遺憾なく暴露された。即ち英國には我國の大本營に相當する參謀總長の上に文官出身の陸軍大臣がその首席となつて、陸軍省高級武官等を議員とする軍事參議院があつて、その上に軍事院以上に權力ある軍事內閣がある。そしてその閣員は皆文官であるが戰爭遂行上、國王並に議會に對し責任を有して居るので、議會は軍事內閣及軍事參議院に對して監督を行ふ權利がある。そこで絕へず作戰に容喙して居て、かのダーチルス、メソポタミヤ、カンブレー等の戰敗後はすぐ議會に審問委員會を設けて調査するといふ風である。そして兵學の素養もない文官出の一閣員が政略上、戰略を云々するので、嚴然區別しなければならぬ政略と戰略はその區別がなく隨つてその弊害が作戰の不振、戰敗の原因となつて英軍の活動に大影響を與へてゐるのである。而して英國は今日の危急な場合にも愛蘭徵兵施行は行き惱み、僅か五十萬の熟練職工をも兵役に服さしむることが出來ずに居る。これといふも畢竟英國人が政治は自己の生命、政治の爲には如何なる犧牲も必用とするといふ信念がある爲である。此の時果然獨軍は戈を擲へて英軍戰線に猛襲を企てゝ英戰線を蹂躙した。そして戰線の動搖はまだ終息しない。そこで英國も終に後れ馳せ乍ら愛蘭に徵兵を施行するといふことになつたのである。

之を要するに政略の戰略に容喙するの不利といふことは、古今東西の實例が明らかに證明して居つて問題ではないのである。近來日本も空論漸く跋扈して來たので、我輩は我國民が政略の爲に戰略を云々するやうなことを前述の實例に鑑みて大いに慎むやうに希望するのである。

戰後の我が國防問題

◎戰後の國防

一　大戰の教訓

國防の充實は國家の權利といはんよりも、寧ろ國家の大義勇といはねばならぬ。既に國家がある以上存立の必要がある。家に戸閉りをなすのと同じ意味に於て、已に家を有つ以上は戸を設けねばならぬ、戸を設くる以上は戸閉りをせねば何の役にも立たない、既に戸閉りをした以上内容に於ても亦充實する所がなければならぬ。國として存立した以上は必ず存立の意義を完了せねばならぬ。國防は換言すれば國家存立の意義を完了するに最も大なる方便である。世に軍備のため多大の國費を費すを以て之を厄介視する連中もあるが、彼の獨將モルトケ將軍が「戰爭は諸君の言の如く多大の費用を要す、然れば未だ戰爭にならざるに、已に軍備のために財政の基礎を破壞する事の愚なるは勿論なり。而かも議會並に國民が軍備に要する經費を出さゞりしとせよ、吾人は決して財産の安全を保つ能はざるなり、例へば吾に國防の力なく、敵が吾が領土内に侵入することあらんには綽々たる財政の餘裕も何の役にか立つべき」といつて軍備擴張を要求した結果、

獨逸は今日の强大を致したのである。

英吉利の提督チルソンは「英國の外交は海軍に在り」といつた。また米國前大統領ルーズヴェルトは「軍備擴張による氣兼よりも軍備なくして苦痛なのが何れだけ多いか解らない」といつて大に米國民を警めた。然り軍備は一國の安泰を保證する唯一の有力者である、軍備なくして國榮へるとしてもそれは砂上の樓閣と一般、一度烈風に遭はゞ一溜りもなく崩壞されるであらう。我輩は力のあらん限り軍備の擴張を高唱したい、要求したい、何故かなれば我輩は此の日本帝國の安泰を欲するからである。

凡そ一國の財政は事の緩急に依つて其方針の決せらる可きはいふまでもないことであるが、教育も經濟も悉く軍備の充實せる完成せる國に於てこそ隆盛であれ、軍備の完全しない國に於ては決して興隆なものではない。此を海外に居る我同胞の言に聞くに、彼等が例へ平時であつて見ても、我國旗を飜した軍艦を見る時は如何に力强く感ずるかは、內地に居る人の迚ても想像も及ばぬことであらうといつてゐる。平時に於て尙且然りである、今日のやうに戰亂の時期に際して、我軍艦が我在外民の居る所に一艘宛も碇泊し得るとしたならば、彼等は何んなに愉快だらう、何んなに力强いだらう。力强く愉快であれば即ち貿易の發展に大なる効果があるのは言はずと知れたことである。

我輩は今次の歐洲大戰に鑑み益々我軍備國防の不完全なるを感ずるものである。彼の永世中立の保證の下に、歐洲の樂天國として永遠の福祉を夢み、約七百萬の人口と二十五億の貿易額を有しながら、國家の維持を他國に信賴したる白耳義の現狀は如何、プリヤルモンの如き愛國家があつて盛んに軍備擴張の必要を唱道してゐたが、その國會議員は豫て白國を經過して佛國に進入した獨逸のために買收され軍事豫算に對して協贊を與へなかつたのである。唯僅かにリエージ、ナミユール等の要塞を近頃築城に改造して滿足してゐた有樣であるが、その結果開戰劈頭敵に蹂躙さるゝの大悲慘を免かれ得なかつたではないか。

次に世界の陸軍國を以て自他共に相許した露國は僅かに以前即ち一九一三、四年の間に、佛國の三年兵役復活策に應じて其在營年限を延長し、獨逸亦之に酬ゆるに所謂八十萬常備兵を以てしたが、交戰後未だ半歲にならずして早くも兵器彈藥の缺乏を訴へガリシヤ一戰後終に大敗を見るに至つた。

吾人の遺恨骨髓に徹すといつて、東の方獨逸を睨み居ながら幾十年、軍備の擴張を忘れてゐた佛國を其國土の一部を未だに獨逸の蹂躙に任せてゐる。若し夫れ英國に至つては、彼が開戰前戰後の如き考へを以て軍備に熱心であつたならば、今次の大戰は之を未然に防ぐ事が出來たであらう。實に我輩は今次の大戰によつて常に軍備の擴張に不熱心なりし國々の憐む可き狀態を見て、其怠慢を責めざるを得ない。之を帝國の現狀に顧みたならば思ひ半に過ぐるであらう。而して今や露國は敗戰と革命に崩壞し、羅馬尼亦之に倣ひて獨逸と單獨講和し、東部戰線は全く獨逸の成功を以て一段落を告げた。又塞爾比及黑山國は國土を擧げて敵國の蹂躙に任じ今は僅かに他國の厄介になつて政廳を支持してゐる有樣である。而して西部戰線に於ては三月下旬以來獨軍は英佛兩軍の中間を突破して戰局最後の死命を制せんと努力してゐるが、幸にして英佛兩軍の守備宜しきを得て獨軍の跳梁を許さゞるものがあるが、獨軍亦巧みに交通機關を利用して之に當つてゐる。伊軍も昔日の如く振はず、米兵大擧して海を超えてゐるけれども、此れ亦長驅馬腹に及ばざる恨があつて、戰局の前途尙依然として不安の狀態にある。

二　國民皆兵主義

從來の軍政家は多く歐米の例に倣ふて假想敵なるものを作り、之を攻め之を防ぐを標準として軍備を整ふることを主張してゐた。しかし今次の大戰の結果終に是れ机上の空論であることが明瞭になつたのである。即ち今日の戰爭で各交戰國の使用してゐる兵員が第一線のみでも獨の三百六十五萬、佛の百七十四萬、英の百三十八萬、之に對する動員總數は獨の千二百三十五萬、英の六百五十萬、佛の六百九十二萬といふ如き驚く可き數に達し猶ほ不足を感じつゝあるのである。斯の如き大兵數を以て假想敵から割り出す事の困難な事はいふまでもないことである。否平時に於てこれだけの兵力を備へ得る國は世界の第一富國を以て任ずる米國に於ても不可能なことであらう。蓋し現代の戰爭は曩きにも曰つた通り國力の比較である。政治、經濟、人口總ゆる國民の力の比較を意味するものであるから、これを以て我輩は我帝國一朝有事のために備ふ可く國民皆兵主義を實行したいのである。國民皆兵主義とは現に我邦に於ても行はれてゐるが、今少しく具體化して我が國民軍制を悉く補充兵制に改むるのである。彼の二十五師團とか、二十五軍團とか、

唯單に徴兵によつて招集した兵のみを以て兵隊としてゐたならば假りに一箇師團三萬人とした所で五十軍團で三百萬の兵員しか得られない理由である。三百萬の軍隊を以ては、世界の强國として覇を東洋に唱ふるには餘りに不足である。滿鮮の防備に要する兵隊でも、現に今日西伯利を充な分に堅めければならないといふ問題が起つた時には、此の方面のみでも足りない位である。況んや印度の防備をや、更らに世界の悉くを敵として起つた時を想像したならば、誰れか我輩の國民皆兵主義に反對するものがあらうか。

三　精兵にして多數なれ

獨逸留守參謀總長フオン、ローリングフオー將軍は其著「世界戰に依る推斷」に「マルヌ會戰に於ては兵力增加の必要上止むを得ず教育不十分なる急設軍團を右翼に使用した、之が該會戰失敗の原因で當時若し此方面に精鋭なる軍團を用ゐることが出來たならば、一九一四年既に西方戰場の死命を制し得たらうに」と嘆じてゐる。實に兵力は多數なると同時にまた悉く精兵でなければならぬ。我輩は今日聯合諸國を壓しつゝある一切の軍費及犧牲は一に之を戰前に於ける軍備施設の怠慢に依るものなりと斷言するを憚らぬ。若し聯合諸國にして十分の軍備を完備して居たならば、決して今日の如き慘狀と戰爭の持久とを見ることはなかつたであらう。

併し譬へ後れたりと雖も成さゞるに如かずで、英國は大戰の教訓によつて其永年の誇りであつた志願兵を徴兵令に改正して、現に六百五十萬の大動員を行ひ戰場に二百萬の軍を送致してゐる。即ち世界に於ける大海軍は忽ちにして世界に於ける大陸軍となつたのである。又米國もさうである。急に徴兵令を布き最初二百萬の兵を徴集し、最近五百萬の兵を準備せんとしつつあるといふことである。而かも例のルーズベルトの如きは、戰後尙此の大軍備を持續することを高唱してゐる。畫軍備の高唱をなすもの單りルーズベルトのみならんやで、佛國と雖も英國と雖も列强が大なる威嚴ある條約の下に軍備の制限をなさない以上は、現在の大軍を縮少することはあるまい。否例へ條約に依る縮少は行はれた所で、それは表面上のみで內面には必ず又を磨く國であらう。また條約をして最も威嚴あらしむるためには、その條約違犯をした國以上の兵力を使用することが能きないならば、條約そのものには何等の權威はないと曰はねばならぬ。

要するに軍備の擴張は精兵にして多數なる兵員を要求することを忘れてはならぬ。然らば精兵

は如何にして得らるるかといへば、之を獨逸のやり方に見るに、彼は有識階級の者は大部分之を一年志願兵として徴集し、國民亦志願兵たる事を非常に光榮としてゐる。戰前に於てすら歩兵一聯隊に對し志願兵二百幾十人の多きに達したと曰はれて居る。佛蘭西の兵事雜誌に一九一六年七月ソンム會戰に於ける英佛軍の攻勢に就て觀察が載つてゐる。其一節に獨逸統帥部が約二十箇の歩兵大隊を廣大なる戰線の十箇師團中より拔き取り以て一混成部隊を編成し聯合軍の攻勢に對抗せしめたるは應急の策として止むを得ざる事ならんも、獨逸軍が斯の如き大規模の行動を而かも戰線に於て成し得るのは、其平素の訓練良しきに適ひたる結果に外ならぬと賞讃してある。元來固有の兵團を解き混成されるのは、その充分の能力を發揮し能はぬが兵家の原則であるけれども平素訓練良しきを得てゐるならば、却つて反對の功果を齎すものである。是混成は多く優秀なる兵を拔いて成り立たせたものであるからである。即ち我輩が精兵を叫ぶのは凭んな理由があるからである。而して多數を要求するのは敢て多言を要するまでもないことである。

四　世界は縮少されたり

交通機關の發達は世界を極めて縮少してしまつた。今より一世紀前奈翁成業後三年にして初めて知つたといはれてゐるが、今日の事は今つて、我幕府の知つたのは奈翁成業後三年にして初めて知つたといはれてゐるが、今日の事は今夕に知り得る現代の文明からいへば實に隔世の感がある。現に大正三年七月三十日露國の態度決するや、八月二日に於ては已に横濱市場に於て鐵物の暴騰を來たしたといはれてゐる。歐洲大戰が獨露に幕を切り落され、佛國に及び、海を越えて英國に飛火し又遙かに東洋に類燒したのは僅かに半ケ月の中であつた。斯う世界の一波紋が擴大するに迅速であつては今後一國對一國の戰爭は絶無であるかも知れぬ。換言すれば今朝は亞細亞の危機を唱へてゐるが、今夕になればまた世界の大戰になるやも計り難い。吾人が亞細亞の日本としていつてゐる時代は已に疾くの昔過ぎ去つてゐるのである、實に吾人は今日に於ては最早世界の日本である。

露國の崩壞後未だ幾何もならざるに、獨逸勢力の東漸は日に日に盛んにして、最早歐洲大戰は事實上世界の大戰となつて、日獨は互に鼻をつき合せてゐるのである。彼のブレストリトウスク會議に於て、最大の暗礁であつて波蘭リタウエン、エストランド等の占領地は講和條約に依つて露國の主權下を脫したるのみならず、ウクライナ、クタウエン、リブランド及びエストランド、

芬蘭、クールランド、ポートランドは獨逸皇帝若くは皇族を戴く王國等を建設し、露國より獨立したダウリヤ、タタルパシユキール、サラトウ及高加索の四共和國も獨墺に屬する狀況に在る。そして聯合各國は曩に獨逸の空言せる民族自決權に依る獨立認容を許さざる旨を絶叫してゐる。しかし聯合國の威力遂に同盟軍に如く能はざれば國境問題は結局獨逸の主張に甘んせねばならないだらう。果して然らば獨逸の國境は東進して實に面積十九萬六千七百三十方哩の廣大なる範圍を有する事になる。即ち其國土の三倍を併有し得たことになるのである。斯の如く獨逸の東進は何を意味するか、我輩の口を酸くして曰ふやうな「伯林バクタット」が「伯林印度」政策となり、愈々極東は獨逸對日本となり、米國亦南進し英國來り、此に正しく第二の巴爾幹が出來上り、第二の歐洲大戰が起りはすまいか。然り獨逸は着々として東へ東へと進んで來てゐる。然かも英國が戰後其大なる軍備を以て印度に備へるだらう、是我同盟國として何等の不安なきのみならず、極めて結構なことであるが、印度の大武備は延いて米國の南洋武備を促がし、加ふるに我帝國の防備を餘儀なくせしむるのである。假りに日英同盟の情誼が尙一層良好になる場合があると假定すれば、若し現在の戰局の儘なれば地中海が已に中央同盟國に依つて制海權を握られてゐるとすれば、印度と英本國との連絡は絶たれてゐる譯である、所謂印度は無援の孤立國である。此時に及んで日英同盟の義務擴大されて我國が印度に向つて出兵せねばならぬのは言はずと知れた事である。我輩が昨年四月獨逸の東進と印度革命黨とを說く時我邦の多くの人々は此を一笑に附して顧みなかつたが、最早今日に至つては笑ふ所の沙汰ではあるまい。而かも西伯利には二十萬の俘虜が武器をとつて起つてゐる。今日軍事專門家の見る所では、印度と西伯利とが中部亞細亞を通じて連絡されるやうな獨逸の計畫であるらしいから、此際我國民は大なる決心を要するのである。

五　戰禍東より起らん

最近外交史の多數なる頁を要したものは、巴爾幹問題であつた。從つて今次の大戰が其禍根を巴爾幹に發してゐることは我輩の曰ふまでもないことである。

所が巴爾幹問題は例へ勝敗が五分々々にした所で、曲りなりにも今暫らく收まるだらう。巴爾幹問題の收まると共に、列强が其創痍を癒す可く大活躍を試みる所は何地であらうか、言ふまでもなく東洋たるは勿論のことである。換言すれば帝國は極東問題否な寧ろ次に來る可き極東の大

問題に對しては絶對權力を揮ふだけの實力を有せねばならぬのである。之がためには極東に於て最も優秀なる陸海軍を養ひ得るだけの力がなければならないのである。人或は戰後幾分の平和を論ずるものあるも、軍備の競爭を除外しては一つの空想に過ぎない。ウイルソン大統領の曰ふ如く軍備の制限を事實と考へたならばそれこそ却つて戰爭を速かならしむる位であらう。

我輩の此際最も憂慮に堪へないのは隣邦支那の政爭である、正直に告白すると支那が南北互に徒黨を組んで何時も鬪爭を事としてゐるのは野心ある國にとつては非常に幸福な事である。故に野心ある國は此の爭鬪に乘じて自己の利權を擴張しやうと計る、支那は自家の損失とは知りつつも北方に備へ、南方と鬪はんがため終に利權を讓與して了まふことになるのである。支那の不利益は即ち我日本の不利益で支那に他國が發展して來るのは直ちに我日本に影響が及んで來る、無論その發展が純然たる經濟力なれば極めて悦ぶ可きことだが、經濟の援助は直ちに政治向に干渉する事となるので一國が支那に向て發展して來る度毎に我邦に危險を伴ひ來るといふ風である。しかも支那人が永年政爭に疲れて多く事大思想に捕はれてゐるため、度々懸引をやられたり裏をかかれたりする事が多い。凭んな具合で遠い歐米各國では互に其短所が解り難いため支那人を口說き落すことが容易であるが、我日本は地理的便利なため却つて其國民相互の短所が解り過ぎてなか〳〵圓滿にして眞實なる日支親善が出來ないのは我輩等の深く遺憾とする所である。

今回幸にして日支軍事協約も成立したことであるから、百尺竿頭更らに一歩を進めて日支同盟を形成し、大に我が大亞細亞主義を發揮したら亞細亞民族のため氣を吐くことになるが、現在の支那の狀態では到底實現しさうにもない。

印度のことに就ては已に之を述べた通りである。我輩はこの兩者が已に列强の戰後の療養場となるのに、此頃また西伯利といふ療養場が一つ加はつて來たのに極東の地益々多事なりと叫びたいのである。當に此時に於て我國は獨り戰爭成金の熱に浮され、武陵桃源の夢をのみ貪つてゐたならば大勢の趨く所正に知る可きのみである。

六　如何に大なるも軍費は國を亡さず

平和時代に生れた人々は戰爭の如何なるものかを知らない、また軍事專門家の極めて危險視してゐることでも普通の人々には眼前に敵が脅かさねば恐れない。そこで世間では往々軍事費にな

ると恰も泥溝の中に捨てる位にしか考へない人々がある、以ての外である。換言せば軍備擴充は國家の經濟、國民生活を危うすとは軍備制限論者の常套語であるも、國が亡んでは國民生活もないではないか。世界の歴史は軍備貧弱なりしために國亡びた例は隨分多いが、軍備强大に過ぎたるため滅亡した例は絶無である。之を遠く古代に溯るも世界の最古の文明且强國たりし埃及は如何、其文明も隆盛を極めたる時代は國民尙武進取の氣象に富み、立派な軍隊をも有して武士は僧侶と共に最高の階級に屬してゐたのである。然るに地味肥沃にして民富み漸く奢侈の風增長し士氣衰へ遂にアッシリヤ波斯のために征服せられた上後にはローマの屬國となつて了まつたではないか。アッシリヤ及バビロニヤの如きも略ぼ埃及と其盛衰の理を同うしてゐる。元來之等のセミチック民族は國家的觀念に乏しく自治獨立の氣風を缺き宗教に淫して武事を忘りたる爲めに、蠻族の侵入するに及び容易に亡ぼされたのである。是等は軍備を重んぜずして亡びたる好箇の例證である。波斯はキロス、タリオス等の英邁なる君主出で特にその國民先天的に武事に長じ、當時其軍隊の如きは世界に比肩するものなく向ふ所敵なしと云ふ勢であつた。而かも波斯の亡びたのは其軍隊の强大なりし爲めではなく、その國民漸く奢侈に流れ、傳來の尙武的氣風衰へたるがためである。彼の希臘の起りたるは其國民進取尙武の氣風に富み、特にスパルタの陸軍、アテチの海軍は當時世界に冠たるものであつたのであるが、その亡びたるは小國分裂して內訌を事としたると比隣に優秀なるマケドニヤの軍隊起り遂に征服せらるゝに至つたのである。羅馬の興隆も亦其卓越せる軍備に胚胎し、世界的大帝國を經營したるは一に其優秀なる軍隊の力に在る。驕つて中世紀を見るに蒙古盛衰の跡之を證し得て餘りあるだらう。ワルテル、ベークホットの言へる如く、世界の歴史は戰爭に强き民族と戰爭に弱き民族との生存競爭にして其都度前者は勝を制したる武力競爭史に外ならず。またアダムス、スミスは國防は富よりも重大なりと喝破したる等悉く國防費の過大なる爲め國亡びたる歴史にはあらずして、國防を疎略にしたため崩滅した國の證左である。

今や軍備の不充分に苦き經驗を嘗めたる交戰國は戰後國家經濟や財政の關係を以て軍備を縮少するが如き國は決してないと斷言して憚らないのである。戰爭中各國が募集した公債額は英國の五百億、佛國の四百億、露國の二百五十億、伊太利の七十五億、獨逸の四百二十億、墺匈國の二百二十億にして、各戰前に於ける二倍乃至十五倍以上の國債を增加してゐるのである。而して各

交戰國の戰費一日三億圓、獨墺側の死傷延人員九百二十萬、聯合軍側千三百八十萬に達し、其他有形無形の損害は莫大なものであらう、若し聯合國にせよ獨墺側にせよ、其平時に於て準備を完了し各國をして窺ふ能はざらしめてゐたならば、決して今回の大戰を惹起するやうなことはなかつたらうに。

殊に我等の深く注意を拂はねばならないのは、戰後に於ける戰勝國も戰敗國も、互に大に軍備の擴張を計る事である。是れ平時に於て亂を忘れてゐた連中、眼前の慘劇を以て思ひ出した譯でもあらうが、兎に角大擴張があるのは歷史の證明する所である。故に今次の戰爭後も各交戰國は何は扨て置いても、軍備の擴張を計るだらう。我邦は幸か不幸か直接交戰國たるの厄を脫がれてゐるので、泰平の夢を貪りつゝあるが其結果が果して何うなるだらうか、思ふて此に至れば實に感慨無量である。

七　我が徵兵制度

今日列强が如何なる制度の下に徵兵を召集してゐるかといへば、其多くは二十歲乃至四十歲までを兵役に義務あるものと定めてゐるが、獨逸の如きは二十歲乃至四十五歲とし、佛國亦二十歲乃至四十八歲として兵役を課してゐる。此等は勿論戰時中一時變態の制度を布いてゐるのだが、凡そ軍備をなす以上は此の變態時期たる戰爭を豫想してゐなければ、いざ有時といふ場合何の役にも立つものではない。否軍備は平和の保證のためといふが、戰はなければ平和が求められないとすれば、兵備は結局戰ふためであるといつても差支がない。

一八〇六年普國がイエナの會戰に於て一敗地に塗れ、奈翁のために其常備兵力を四萬二千人に制限せらるゝや、軍政家シャルンホルスト出でゝ一定の常備兵員に短期教育を施して歸休せしめ戰時之を召集するの制度を設けた。之が國民皆兵の制度の基である。一八一三年の役には二十三萬の既教育兵を召集し之を以て英軍と協同して奈翁を破り、以て普國を累卵の危きより救つたのである。爾來國民皆兵の聲は漸次全歐洲に擴がり各國共此軍制を模倣し、平時最少限の常備兵を養ひ戰時多數の既教育兵を得んとするに至つたのである。

併しながら今日の戰爭は昔日の戰爭に比し餘程異つてゐる、科學の進步は諸兵機の革新を日一日と促がし、而かも大部隊にあらずんば何の功果をも收め得ないやうな戰術に化してゐるので一

層軍紀の嚴肅を要し、形而上形而下に於て軍隊の教練を益々重大ならしめてゐる。從つて昔日の如く短期教育を以て之に充つることはなか〳〵困難になつて來た。此に於てか各國は教育の最も簡單なる歩兵と雖も二箇年、特科兵種に至つては三年以上の教育を施してゐるが、大戰によつて得た所の教訓によれば此にても猶充分でないかの感がある。我二年歸休制にした所で、平時の在營期間を悉く演習にのみ用ゆることは出來ない。勿論行住坐臥片時といへども諄々訓化し教へたることを實行せしめ寸時も忽にせざる故演習はしなくとも軍隊的教育は受けてゐる、從つて演習以外の勤務も教育には異いないが、戰鬪的演習に費す時間は在營日數の約百分の五十二位に止まつてゐる。この一年位の短日月で充分なる教育が能きやう筈はない。我輩は國家經濟の上から決して之を以前の三年兵役に直せとはいはないが、之を補充する途を青年會や在鄉軍人會に求めたいと考へてゐる。

今列强の總男子と總動員の百分比を示すに

國名	總男子數	總動員數	百分比
露國	八八四〇萬	一六六〇萬	一八、六%
佛國	一九六〇	六九二	三五、三
英國	二二〇〇	六五〇	二八、六
伊國	一七〇〇	四〇〇	二三、五
羅國	三七〇	八二	二二、一
白國	三八〇	四五	七七、八
塞國	二三〇	七〇	三〇、四
米國	五二〇〇	一五〇	二、九
獨國	三三五〇	一二三五	三六、八
墺國	二五四〇	八九〇	三五、〇
土國	一二七〇	一一三	二、〇

各國總男子と平時兵力の百分比

國名	總男子數	平時兵力	百分比
露國	八八四〇萬	一四二萬	一、六一%

佛國	一九六〇	七五	三、八四
英國	二二〇〇	二五	一、一四
伊國	一七〇〇	二五	一、四七
羅國	三七〇	一〇	二、七〇
白國	三八〇	八	二、一一
獨國	三三五〇	七八	二、三三
墺國	二五四〇	四一	一、六一
土國	二二七〇	二五	一、九七

である。

八　我が軍制の缺陷

現在我國では最近毎年の適齢者五十萬の内僅かに十萬内外を旗下に召集するに過ぎぬ。而して内一部は補充役に充てられ、此内眞の一部に軍事訓練を施すに過ぎないのである。

而して兵家の兵を用ひるのは、今次の戰爭のやうに壯丁及國民の壯年全部を擧げて之を出征せしむるやうなことは極めて拙なる方法である。即ち不斷の訓練が行届かないから兵隊の數を無理に集めて之に當る手段を取らねばならないのである。然し之を常に訓練し何時動員の下るも差支へない準備をつけてさへ居れば、兩國干戈を交ゆるや一擧忽にして之を屠る程の精鋭が出來る譯である。この精兵があつてこそ擧國一致を無理强ひに强ひ、女子をして迄軍隊に出るやうな窮策を執らないでも濟むだらうし、また重掌や巡査ほ他の壯年者を以て代はらしむる位の餘裕は出來可き筈である。否兵家の最も巧妙なる策畧は常に敵をして隙を窺ふ能はざらしむる用意である。若し夫れ一朝戰端を開く塲合になつたならば、其當初より精鋭無比の大軍を送り、その後方に之を彈撥補充すべき强大なる既教育兵を貯へ、且つ戰爭遂行に支障なき程度の軍需品製造力と國民生活に必須なる產業力を保持せんがためには、平時に於ける陸海軍を擴充し、壯丁男子は不具癈疾にあらざる限り、一度は悉く徵集して軍事の教育を授け、戰時に際し血を國家に捧ぐる義務を公平に負擔せしめ、茲に始めて國民皆兵の主義を徹底せしめ得るのである。

この國民皆兵の實を擧ぐるには、先づ我徵兵制度を改正することが最も肝要である。我輩は苟

も壯丁であれば其不具癈疾者は悉く軍籍に入れ、其入營し能はざる（國家經濟上）部分は青年會及在鄉軍人に於て豫備教育を受くる義務を負はしめ、入營後僅かに二ケ月三ケ月に於て軍隊的訓練を完了する迄豫習教育を施す可きことを主張するのである。

他或は現歐洲戰亂に於て英兵の如き、米兵の如きが其の一夜造りなるにも拘らず極めて活潑に働いて居るのを見て其不必要を說くかも知れないが、若し彼等にして不斷の訓練が滿足であつたならば、何れの點からいつても數字に於て優つてゐる聯合軍が勝たない理由はない。その上我國の國民生活及語習慣が極めて軍隊式とは遠かつてゐる。些細なことではあるが入營早々の新兵には服の着方から知らない者もあれば、靴のため非常に苦心する者もある位だから、西洋の一夜造りの兵隊とは餘程優劣があるといはねばならぬ。唯我等の心强く思ふのは我軍隊の有する日本男子の意氣である、この意氣があつて兵數多く武器完備したならば是正に一騎當千、世界總掛りで攻めて來ても何の憂ふ所はないのである。要するに我輩は兵員補充の方法として青年會、在鄉軍人會を一層有効に活動さしたい希望である。

◎我が海上の防備

一　將來の日本とその軍備

歐洲戰亂の終末及びその戰後に於ける國際關係は吾國にとりて最も重要なもので、若しこれに對する方針を誤つたならば、それこそ我國の危急存亡の秋にて誠に由々敷一大事といふべきである。而してその方針が宜しければ邦國の基礎を盤石の重きに置き、更に我國民が全世界に向つて大活躍をなすことが出來るのである。而してその問題たるや、支那に對する方針と、南洋に對する發展、南北兩米及び濠洲に對する民族的發展とである。かの人口二億を有する支那人を向ふにまはし、世界の列强の中に立ち、その通商に於て、その他の事業に於て、優勢の地歩を占め得るその力量、その手腕が我國にとつて最も必要なものである。南洋に於ける發展及び南北兩米及び濠洲に對する我民族的發展に就ては、英米間に種々の排日的運動によつて妨碍されつゝある。大體人類の生活上、衣食住に不自由のない適當な餘分の空地があるならば、我日本民族はその方面に向つて相當な地歩を占むべき正當の權利が有る筈である。無論征服主義に依つて他の民族の領

土を併呑するのは不可であるが、他の民族を佐けて未開の地を開拓するは少くも之に異論を挾さむ譯はない。この世界各國の領土が私有財産の如く、いかに荒れ果てた地があつても、それを處分するのは所有者の權利であつて、決して他人の干渉を許さぬとするなら、それは德義上斷じて許すべからざることである。されば南北兩米より濠洲に至る太平洋上にある土地にして右の如き狀態にあるならば、邦人の移民に就て邦人の人格劣等ならざる限り、之を拒絶する理由はないのである。しかも北米、濠洲の我國民の入國を拒絶するのはそも〳〵いかなる理由があるのか。我輩の思ふ所に依れば、吾國民が日清、日露の兩役に於てその猛勇を世界に轟したので、彼等は日本人を恐れ且つ厭ひ、寧ろ敬して遠ざくるに若かずと爲して居るのである。即ち彼等は邦人を氣味惡く思ふて、一種の猛犬視して居るのである。しかし彼等は猛犬視するも猛虎視せぬのである。茲に於てか吾人は我國力を充實せしめ武備を偉大にし、彼等をして猛虎視させんければならぬ。若し當方の要求を容れずんば、戰慄すべき雷の如き咆吼の聲を豫期せねばならぬとすれば、いかでか彼等は徒らに種々の辭柄を弄して拒絶し得るものであらうや。

斯く觀じ來れば問題といふも極めて簡單で、我國家の威力の足らざるに期するのである。大體國際關係の問題は、その正義の主張、豐富なる財力、偉大なる兵力、この三つの威力によつて解決するものである。この中二個の威力を有するものは禦侮折衝の道を行ふ望みのある者である。その一を有するに過ぎざるときは如何に巧妙な外交的手腕有りと雖も、問題を解決することは至難である。而して正義と富力とを有する場合には、その富力が他國の財政界に重要視せられ、若し戰端を發せば、その爲に他國が財界に大影響を蒙むるといふ場合に於て、問題を解決し平和を維持することが出來るのである。故に富力といふものは戰爭關係に就て消極である。進んで我主張を貫徹する積極的要求は武力に存するのである。豐富なる財力を有し、偉大なる兵力を有すれば無論それは最優勝者である。例へ正義を無視して無道の擧動に出づるにしても何等の反對を加ふることは出來ない。併し乍らそれは一時的で後にはその國民が必ず放縱となり腐敗して、遂に亡國の悲運に陷るのである。

扨て日本の財力は決して威力として對手國に適せしむることは不可能である。故に我國は世界をして畏懼せしむるに足る偉大なる兵力を養ひ、我正當の主張を貫徹し、その間に充分な財力を養ふことが肝要である。今日のやうな大切な場合には幾分富力を割いて兵力を偉大にし、他國を

して我主張に異議を挾みきらぬやうにしなければならぬと思ふ。唯問題は如何なる程度迄軍備を擴張すべきかといふことである。古來兵力充實の爲國本の衰頽したといふことはその類例に乏しくないが、それは多〳〵自己の利慾の爲に兵力を弄して、正義の主張の爲め自國の防衛の爲め軍費の支出を吝んだ爲である。雄國の興起するや必ず兵力の充實に財力を傾注して居る、これは吾人が大いに猛省せねばならぬ所である。

二　我國の海上防備

我國の如き海島國に在つては、この兵力の充實を計るには、先づ海上に於ける武力を充實せねばならぬ。進んで國力の發展を計るにしても、退いて國家を防備するにしても、等しく海上の武力によつて行はなければならない。海島國はこの偉大なる海軍力で如何なる國際問題をも整理し最後の優勝地位を占むることが出來るのである。之に反して大陸國は、國防策として强大なる陸軍を具備し、世界的發展を爲さんが爲に更に優大なる海軍を備へなければならぬ。即ち島國に比して二重の負擔があるのである。然るに中には大陸に利害關係ある海島國は是非大陸軍を具備する必要がある、決して偏輕偏重を許さぬといふが勿論この言にも一理ある。併し大陸に陸軍を輸送するにしても、その先決問題となるのは海上武力の優劣に歸するのである。海上武力が敵の海上武力よりも劣勢なるときは、如何に强猛な大陸軍ありと雖も奈何ともすることが出來ない。若し大陸に陸軍が派遣されても海上權を敵に制せらるゝに於ては、その出征軍は遂に亡滅の悲運に陷るのである。ナポレオンの如き英雄さへ僅か九里の狹水道に對し、英國を睨みつゝ奈何ともすることの出來なかつたのを見ても至極明瞭である。從つて海島國の武力としては海陸武力の充實を計るには海上武力の充實を先とすべきである。

問題は斯樣に簡單であるのに、世の論者は實際斯樣に簡單でないと云つて種々問題を提供して世人を迷はして居る。若し萬一大問題に際會したる際小事に拘泥して方針を誤つたならばそれこそ一大事である。

我輩は以上の見地より、是非とも海軍の軍備擴張を渴望するのである。そして軍備擴張の性質として少しも餘分の事なく、又現下の形勢に照らし最低標準以上の武力を主張するは不穩當であると思ふ。聞く所によると陸軍は大陸方面で攻勢をとり、敵を適當の所で喰ひ止める必要上之に

よつて標準を極めねばならぬといふ。海軍も同樣で東洋方面で敵を某地點に喰ひ止めなければならぬと立論しなければならぬ。併しこれは陸海軍對立問題である。我輩は先決問題として海上の武力を充實し、その上陸上武力充實の策を講ずるのが至當と考へるのである。

それで海上の武力を充實するに、その武力に標準を定むる單位がある。その單位といふのは編成を指すのである。さてこの海戰に實用する一單位とは如何なるものかといふに、通常左の通りである。

戰艦	八隻
巡洋戰艦	四隻
偵察用巡洋艦	八隻
水雷戰隊	三隊
大型潛水艇隊	二隊

（潛水艇隊には海岸防禦專用艇を含有せず）

他に航空機及艦隊附屬特務艦船若干

この編成が通常八四艦隊といふものである。この最低單位は未だ理想的のものでなく、一最高指揮官の下に充分に働くことの出來るものは右の二倍でなからねばならぬ。しかもその單位の素質は最新式の軍艦、例へば竣工後四五年以內（獨逸の八九年以內、米國の七八年以內、英露兩國の六七年以內）のものが必要である。それでその結果は

戰艦	十六隻
巡洋戰艦	八隻
偵察用巡洋艦	十六隻
水雷戰隊	六隊
潛水艇隊	四隊

といふことになる。これならば一旗將が一海面に於ける最大單位で、一海面に於ける戰鬪で敵軍が如何に强くとも、堂々雌雄を決することが出來るのである。

次は海上武力の標準を定むる想定敵國である、これは何も想定敵國が眞の敵國といふのではない。唯海上武力を養ふ必要上想定敵國として相見るのである。想定敵國とは斯の如きものである

が、これに因つて海上武力の標準を定むるには、左の點に注意する必要がある。海上武力を成形する艦隊の編成上より觀察すれば、今より二十年も前には英國の外はどんな海國でも、一海戰單位は勿論一戰戈單位をも備へてゐなかつたので、各國とも單位を軍備の考察上に置くなどは夢想だにしなかつた所であつた。然るに最近二十年に於て世界の海軍に大變動を來たして長足の進歩をなし、軍備の思想も變化し幾個かの單位を以てその海上武力の標準とするやうになつた。

我海軍の如きも日露戰役以前に於ては六六艦隊を造らんとした、その當時世界の海軍は至つて幼稚なもので一戰單位論に入るなどいふことは思ひもよらなかつたので想定を以て軍備の標準としたが、今日では我海軍は一單位の充實にすら困難といふ風であるから、想定敵と均衡を維持せんとするが如き議論は、單位充實の後明白に論究せねばならぬ。今試に明治三十五年頃の各國の海上武力の中堅(第一線海上武力)たるべき軍艦を列擧すれば、

新式戰艦

英	二十四隻(平均	一四二〇〇噸)	
佛	十 隻(同	一一三〇〇噸)	
露	七 隻(同	一一九〇〇噸)	
獨	七 隻(同	一一一〇〇噸)	
米	七 隻(同	一一七〇〇噸)	
日	六 隻(同	一四〇〇噸)	

新式裝甲巡洋艦

英	十 隻(平均	一二八〇〇噸)	
佛	二 隻(同	九七〇〇噸)	
露	二 隻(同	一二三〇〇噸)	
獨	二 隻(同	九六〇〇噸)	
米	二 隻(同	八七〇〇噸)	
日	六 隻(同	九七〇〇噸)	

の如き事實で英國以外、一國と雖も一戰略單位をも編成する實力無く、日本艦隊のやうな立派な配合を有するものは他になかつたのである。それで諸海軍國は單位を以て比較する程度でなかつたので、海上の武力は相互の比較によるより外なかつた。然るに日露戰爭後世界の海軍國は驚くべき熱心で軍艦新造に全力を盡したので、今日では最早同一の單位を以て論ずることは出來ぬ。即ち諸國の海上武力の比較は想定敵觀念から單位觀念に移り、復想定敵觀念に還つたのである。然るに我海軍は日露戰爭以前早くも諸國に先立ちて完全な一戰略單位を組織し得たが、その後諸國の海軍の進歩著しく、とても想定敵標準を以てすることが出來なくなつたので、第一に一單位を完成にする爲に八四艦隊の主張となつたことゝ思ふ。併しこの八四艦隊でもまだ〳〵不充分である、更に二箇の戰略單位で一個の海戰單位としなければ諸國の海軍と均衡を保つことは出來な

くなつた。吾輩は今米國を想定敵國として日米兩海軍を比較するに、

竣工後滿八年末滿の戰艦巡洋戰艦

	米國	日本
戰艦	一四隻	五隻
巡洋戰艦	○隻	四隻

右のやうな有樣で中々想定敵標準など論ずることの出來ないやうな狀況になつて終つた。右の如き狀況を今後も持續するならまだしも大正十二年、我八四艦隊が完成するとしても尙左の如き結果になるのである。

竣工後滿八年末滿の戰艦巡洋戰艦

	米國	日本
戰艦	二一隻	八隻
巡洋戰艦	六隻	五隻

吾輩は想定敵國たる米國海軍を見るに、少なくとも八四艦隊二隊、即ち海戰單位一箇を備ふる必要を認めざるを得ぬのである。

米國は由來近海防禦を以て海軍の任務と思ひ、その造艦政策の如きも主として近海に適するモニトル型に近い低舷の戰艦を造るに在つたが、俄然日露戰役後その面目を一新し、立派な航洋性を備へた戰艦を造ることになり、そして愈々益々海上武力の增大に努め、近年に至つてはその擴張繼續費四十四億弗を支出することを米國の上院、下院が滿場一致を以て議決し盛んにその膨脹を計つて居る。そしてその方針は凡そ左の如きものである。

起工後二十年（竣工後約十六七年）末滿の戰艦巡洋戰艦

戰艦	四十八隻（八隻六隊と認めらる）	
巡洋戰艦	二十四隻（五年間に六隻を建造する目的で二十年で二十四隻となし四隻六隊となる割合なり）	
巡洋艦	若干（約二十隻）	
大型驅逐艦	約八十二隻	約百八隻
中型驅逐艦	約二十六隻	

大型潛水艇　約十二隻
中型潛水艇（五百噸以上）　約八十隻
小型潛水艇　約五十八隻　約百三十八隻
特務船　約三十七隻（內運炭運油船十六隻、工作船三隻、運送船四隻、彈藥船二隻、病院船二隻、水雷隊母艦六隻等あり）

右の大艦隊は千九百二十一年迄に完成の豫定であつたのが、昨年に至つて更に海軍力速成の議起り、其の竣工期を二ヶ年短縮し、十九年迄に完成することになつたのである。

右の計畫の中特に吾人の注意すべきは特務船の常設である。斯くの如き準備は世界各國に例のないもので、若し米國のやうに特務船を常設して居ないと、その有事の時に民有滊船を傭請し、必要の艤裝を加へなければならぬ。それで早くとも四十日以上を要し、咄嗟の用に立たぬのである。これによつてみると米國は已に今日より出師の用意を整へて居るものと云はなければならぬ。加之布哇に莫大な經費を投じて、海軍の根據地とし、マニラには難攻不落の要塞を築き、その中間のグワムにも大規模の防禦設備をなしつゝある。これによつて見れば米國は明らかに太平洋の制海權を掌握し、傲然我國に對せんとして居る。米國は想定敵國たるのみならず或は眞の敵たるやも知れない。若し萬一日米兩國間に衝突を生ずることあらば、我國は一にその海上の武力を以て之に對抗せねばならぬ。

然るに我國の海軍は前述の如く到底米國と比較にならぬ有樣である。故にこゝに唾手一番如何なることありとも是非全力を盡して米國に雁行すべき實力を備へなければならない。それは如何にしても二戰略單位即ち一海戰單位の軍艦を備へなければならぬ。もし果して此の程度の海上武力を備へたならば、米の急速計畫たる第一線艦隊戰艦二十一隻、巡洋戰艦六隻に對し、我が海軍の戰艦十六隻、巡洋戰艦八隻を以てするので、假令優劣の比顯著なるにもせよ、必ずしも勝算ないとは思はれぬのである。併し乍ら米海軍が實際右のやうな艦數に達するのは大正十年中であるので、我海軍は大正十二年に至らなければ八四艦隊の竣工は望まれぬといふことである。では大正十年には彼の戰艦二十一隻に對し、我七隻を以てし、彼の新造の巡洋艦六隻に對し我四隻を以てしなければならぬ。さうすると一戰略單位をも編成の出來ぬ微弱な海軍を以て、二十七隻を全力とする優勢な米艦隊に對し、如何に智勇兼備の名將があつて我海軍を統率して當ると雖も、必

勝を期し難いのである。

三　結　論

右のやうな日米兩國海軍の現狀であるから我海上武力をこの儘に放置することは出來ぬ。即ち戰略單位二個、海戰單位一個だけの精鋭なる第一戰艦隊を備へなければならない。しかしこれを遂行するに困難なるは經費と工業力である。併し經費、工業力も少し考慮して奮發すれば全然不可能ではないのである。即ち經費の如きも、この戰爭の爲に巨商の手に入つた純益だけでも少なくとも六七億に達するであらう。今若しそれを英國の如く百分の八十の重稅を課したとすれば、これだけでも五億を得らる。我國情之を許さずとしても、一年に三千萬以上を課するは決して苛酷なりとは謂はれぬのである。また國有鐵道もその價格十三億以上に達するのである。今この國防の缺陷を充實させる爲にこの國有鐵道を半官半私の仕組に改むれば、これによりても尙六七億の經費を拾出することが出來るのである。今や戰時の收益の爲國民の富力比較的增加して居るので、年額一億以上の募債をなすとも、これが爲め困難を生ずることは決してなからうと思ふのである。

工業力の如きも我民有工場と相當の連絡をとつて必死となつて建造に着手するならば驚くべき製造力を增加するであらう。而して我輩は前記の如き經費と工業力との下に左の如き最も實際に近き、實行し得べき意見を有して居る。それは

一、每年戰艦（巡洋戰艦）三隻以上を新造すること。
二、每年輕巡洋艦　約三隻を新造すること。
三、每年驅逐艦　十二隻以上を新造すること。
四、每年潛水艇　八隻以上を新造すること。

右の新造案は官設工場のみにては不可能であるから、前述の如く官私兩工場にて今後二ヶ年を期して、右以上の製造力に堪へ得るやうに設備することである。

實は我輩は

戰艦　十隻　一年平均二隻
巡洋戰艦　四隻　一年に一隻の割合

輕巡洋艦	十三隻	一年平均三隻
驅逐艦	五十隻	一年平均十二隻
潛水艇	三十四隻	一年平均八隻

右大正八年より大正十二年末に終る。

といふ理想であるがこれに要する經費は七億六千三百萬圓を要し、なかなか困難であるので前者を撰むだ次第である。

要するに我島帝國は國家を防備する上に於て特に海上の武力を充實し、進んでは國際關係より生ずる國利問題に有利な解決を與へ、國利發展の指導者とならしむることである。殊に太平洋彼岸の米國が優勢なる海軍を擁し將に太平洋の制海權を掌握して邦國を脅さんとするに於て、益々海上武力を強大とならしめ少なくとも米海軍と雁行し得るやうにしなければならぬ。我國民は決して日清、日露の戰勝に慣れるやうなことがあつてはならぬ。若し萬一外國と戰端を開く時には必ず外敵を粉碎するだけの決心をなし得る準備が必要である。若し戰敗すればそれに伴ふ慘狀は白耳義に鑑みれば判然たるものである。吾人は茲に勇往邁進我海上武力を少なくとも一海戰單位の位置に進め、神洲をして碧眼奴の蹂躙に委せしむるやうなことは斷じて許さゞるやうにするのみならず、進んで外敵を一蹴の下に擊破せねばならぬ。

因て我國民が今茲に覺醒して、この重要な死活問題に對し、上下一致、結束して海上武力の充實を計り、國威の發揚と、國力の增進を期し以て國家を九鼎大呂の重きに置くといふことに死力を盡さねばならぬと思ふのである。

大戰來る（一）

譬へ修交條約を結ばないにした所で、此頃では外國人さへ見ると親善だの親交だのとお世辭を振り撒いてゐる。當節の人々は此を名づけて外交的辭令といつてゐるが、この外交的辭令といふ位當てにならないものはない、曰はゞ資本要らずの金儲といつた格で、別にお世辭をいふのには些の資本金も要らないから曰ふ分には差支がないが、このお世辭いふ奴に限つて油斷がならないのは今も昔も同じ事と見へて、古の支那人は「巧言令色鮮仁矣」といつて之を警めたり、また巧詐は拙誠に如かずともいつてゐる。兎角油斷のならないのは今も昔も東も西も異りはないと見へ

て悉く君子人からは排斥されてゐる。

國際外交によく同盟だの協約だのいふことがある。この同盟だの協約だのといふことがなかなか面倒なことで、決して親密な亦互に害を及ぼさない國際に於ては同盟も必要でなければ、協約も必要でない。しかし親子の間柄で「若し隣の奴があゝいつて來たら斯う言はう」と內所話もないこともないではないから悉くさうとはいへぬかも知れぬが、凡そ同盟だの協約だのといふのはその國が最も密接なる關係がある、從つてこれに反對されては困るといふ意味で約束されることが多い、即ちその裏面に於ては一歩を誤らば直ちに鐵火を以て應對せねばならぬ國柄が、これ等の約束をして相讓り合つてゐるのであるから、この同盟國協約國が何にかの行違が生じた時位危險なことはない。例へば今回の大戰に於て伊太利が中央同盟から脫したのも其例證である。現在我國は聯合國として英佛米等と手を握つてゐる一方英國とは同盟國であつて、佛國とは協約國、米國、支那亦極めて例の親善なる間柄である。故に此等の諸國が決して我國に對して關係を設くるやうの事は萬々あるまいが若しあつたとすれば如何なるか、世界に國をなし、永久中立國たる保證を得て居れば兎に角（否永久中立國であつてさへ今度の白耳義のやうな事がある）さうでない以上、またお互に軍備のある以上、何時如何なる事變に遭遇するか解らない。その解らないのに備へねばならないからなか〳〵困難であるが、此に例へば英、米、佛、獨、露の五箇國が我帝國乃至東洋を侵して來るとしても、此等の五箇國が全部の陸海軍を東洋に派遣することは出來ないから、其派遣し得る最大限度に對して我要塞及砲臺、海陸軍の準備は如何であるかとを考へて軍政をやるのが最も完全なやり方ではあるが、國費には制限があり、また五箇國一時に鋒を向けて東洋を脅かすやうなこともあるまいから、今までは假想敵を作りて之に對する軍備をなしてゐた。しかし今日の歐洲戰爭は此等の經驗を悉く其根本から覆して了まつた、即ちそれは獨墺の兩國に對つて世界の强國は悉く鋒を執つて迫まつてゐる。故に東洋の地も此等の五箇國が襲來する理由がありさへすれば必ず彼等は何の用捨もなく侵入して來るであらう。然らばその襲來する理由はあるかといへば、我輩は一言にして之に答ふることが出來るそれは「ある」といふのである。然らば何故あるかといへば例へば今次の大戰の源因となつてゐる巴爾幹が東洋にも何程もあるからである。我輩は東洋の巴爾幹の一例として支那及西伯利を擧げたい。第二にこれは東洋の內に入らないかも知れないが、小亞細亞印度を擧げねばならぬ。猶南洋は獨、米、日、英の禍根を釀す

可き醗酵素であるといつても可い位である。しかし此等の事は今次の戰爭の講和問題から延いて來る可き事件が多いので、本問題を解決するのには先づ獨墺側勝つか、或は聯合側勝つかの問題が決せられてから定まることである、隨つて我輩はこの問題から仕末をつけて行かう。

大戰來る（二）

我輩が凭んなことを言へば、或は皮肉にも聞へ、また不謹愼などいつて咎むる人もあるかも知れないが、事實だから已むを得ぬ。

大戰勃發の當初「此の戰爭が何時止むで何方が勝つか」といふ問題は、極めて興味ある問題として我國のみならず世界の話の種であつた、軍人や政治家其他一二流の人々で此の問題に付ては恐らく其意見を發表しないものはなかつたらう。而かも氣の毒なことには悉くそれが外れてゐる。大體豫言とか推測とかいふ位愚かな事はないが、これ位また面白いことはない。而かも的中しない人の不面目であることは夥しいが、的中したとなるとそれこそ相當な理窟をつけて誇り氣に繰り返し繰り返しながら說明する。今から二十年も前の事であつたが、伊太利の何とかいふ天文學者が、地球と太陽が衝突して、地球は粉な微塵になり、地球上の生物は有りと總ゆるだけ崩滅して了まうといつた事がある。氣早な連中はその準備さへおさ〳〵怠りなかつたが、之に對して英國の或る學者は凭んなことをいつた「あの學者位愚な奴はない、地球が破壞して仕舞へば其人は無論なこと、他の人々も皆死んで了まうから、其名譽を褒賞してくれる人はない、また若し萬一これが當らなかつたならば、それこそその學者は最早學問上の致命傷を與へられたのと同じことだ」といつた。

天文學者の豫言した日は來たが、地球は依然として昔しながら壯嚴なる運行を續けるのみで地震すら起らなかつた。氣の毒なのは伊太利の學者である彼は全く致命傷を負ふて了まつた。これと同じ事で今次の大戰にも豫言して失敗した連中はなか〳〵多い、しかし豫言者の全部が失敗したから、幸にも同病相憐むで致命傷も負はず、相變らず今にも口巾廣い豫言のやうなことを曰つてゐるから世の中は妙なものである。

日獨戰爭開始の大原因もこの豫測の錯誤から來てゐるといふ人もある、それは加藤外相が演說して「獨逸は二三ケ月後には敗れるであらう」といつたから、即ち二三ケ月後には日本は戰勝國

として羽振り好い國になると、正直に眞正面から解釋したことであつたらう。例へ如何に加藤が英國の內情に通じてゐるとはいへ、これを決定的に豫測することは困難な位は常識あるものの判斷し得可き事である。然らば何故そんなつまらぬことをいつたかといへば、それは國民に對する景氣附である、反對黨に反對の口實を與へないための豫防線であると見る方が適當だらう。「クリスマスを伯林にて祝せん」といつて、出征の首途に立つた露將レチンカンプ將軍は今は果して健在なるや否やは知らないが、今日露國はクリスマスを伯林に祝ふ所の騷ぎではない。それこそペテログラードに於て祝されんとしてゐるではないか。軍の神のやうに言はれてゐたキッチナー元帥は三年といつたが最早四年を經過し足掛け五年の今日になつても戰爭はなか〳〵止みさうにもない、我輩の如きも或る新聞や雜誌に五年の見當をつけて置いたが、これも當りさうにもない。否戰局は再轉し三轉し、聯合軍も意外に意氣地なく、獨墺軍の旗色はなか〳〵侮り難い、殊に戰線は我東洋に展開され、西伯利危機を告げ、印度亦累卵の危きに立ち到つてゐるといふ有樣である。凭んな具合で如何にも獨墺軍が勝ちさうにあるが、これまた幾多の障害がその前途に横はつてゐる。今日の狀況よりすれば其戰局はまだ〳〵なか〳〵來ないらしい。しかし何時か來るであらう。例へ十年の後、五年の後來るであらう。その來る時は如何にして來るであらうか。我輩は斷言する結局勝敗なしといふことを。何によつて然るかといへば、聯合國の戰の目的は獨逸の軍國主義を滅すといふにありといふ一つの軸象的問題であるからである。よく十四五年前までいつて居つた「板垣死すとも自由は死せず」といふ言葉があるが「獨逸亡ぶるとも軍國主義は亡びず」といふのと同じ理由で、國といふ國が形を造つてゐる間は、博愛主義や平和主義や人道主義許りでは起つて行くまい、若し國際道德の上乘を以て國を亡ぼして仁をなす程になつたなら左に右、苟も國家の存立を希望する以上、或は此所に絕對大なる國が起つて世界の國旗を一つにしない以上、軍國主義が亡びる理由がないことは明かなることではあるまいか。

他或は米國の參戰を以て、大に聯合軍の力となつてゐるやうにいふ人がある。勿論聯合軍にとつては大なる力である。啻にその士氣振興の上からいつても大なる力である。しかし米國は其最善を盡して何程の軍隊を送り得るかといへば今日の所先づ二百萬である。而かも若し二百萬を送兵したとすれば、南の方墨西哥といふ國が控へてゐる、そして此の國は最早米國の味方ではない米國の送兵了はる頃は或は何んなことを仕出かすかも知れぬ恐がある。而かも米國の現狀では二

百萬といふ壯丁を送つては、その經濟に至大なる影響を及ぼすことになるのだから、これが實現するには少くとも三ケ年は要する。燒石に水を注ぐといふことがあるが、若し獨墺側が從來の勢力衰へずとせば、米兵の順々に送られるものは順々に燒石の水と化して了まいはすまいか。

獨逸潛航艇の跳梁素より幾分の減少を來たしてゐるとはいへ、潛航艇を作るのと、軍艦御用船を製造するのとはその比ではない。從つてこれ亦容易にその勢力を失墜することにもなるまい。英國は海洋封鎖をやつてゐるが、門戸のあるやうでない海洋の封鎖はさう容易に出來るものではない。獨逸今日の形勢からいへば、例へ海洋は封鎖されても最早その食糧品と經濟には困らない手段は立つてゐる。それは露西亞の現狀である。

要するに今次の戰爭は、獨逸が巴里、倫敦と攻擊することなく、西部戰場唯僅かに聯合軍に對する防備だけ完全なれば、東部戰場殊に「伯林バクダット」政策に於て獨逸が勝つてゐるといはねばならぬ。また現在獨逸の占領してゐる白耳義、佛蘭西の一部を聯合國に返した所で勝敗は五分五分である。凭んな具合では到底軍國主義所か獨逸でも滅ぼすことは困難かも知れぬ。我等の大に奮發す可き事だが、例へ我等計り奮發して見た所で今日の形勢を挽回することは困難である。

殘念ながら已むを得ぬことである。若し今次の戰爭が我輩の豫測通り五分々々の勝敗で引き分けとなつたとすれば、その後どうなるか。各交戰國は其戰爭に依つて失はれた夥多の費用を償ふ可く、何れの方面にか發展するだらう。而してその發展地は何れが最も便利であるか、南米か、亞弗利加か否此等の大洲には悉く截然たる植民權の區劃がある。即ち彼等の欲する所は第一に我が東洋である。經濟的に東洋が注目されてゐる通り國際問題も悉く東洋を中心として生ずるであらう。のみならず今日西伯利の形勢よりすれば幾多の小弱國が出來はしないかとの恐れすらある。若し數多い小弱國が成立でもするなれば、それこそ愈々第二の巴爾幹である。列强各々この小弱國に秋波を送つて媚を呈するであらう。まだ小弱國はこれ等の强國によつて大に繁榮しやうと試むるだらう。玆に小弱國の爭は引いて列强の競爭となり、列强の競爭は國際問題を生じ、終に戰爭を生ずる事恰かも巴爾幹地方が今次の大戰の禍根となつたのと同一である。

大戰と講和問題

今次の大戰の勝敗を五分々々と見た我輩は、講和問題を議するに當つても矢張之を前提とせね

ばならぬ。しかし茲に考へねばならないのは例へ此の戰爭が五分々々の結果に了つた所で、結局は聯合側に有利な講和條約が結ばれねばならぬ理由のあることである。それは獨墺側と聯合側と比較すれば第一數字の上に於て聯合側の方遙かに强味を有してゐるのみならず、米國の如き又我邦の如きは大戰に就ては殆んど無傷の國が控へてゐるからである。然らば講和問題は日米兩國の主張が大なる關係があるといふても差支ないことになるが、日米の强國なる主張は要するに英佛等の背景となり援助となり得る性質のものであるから、聯合國が有利な立場に立ち得ると認められる譯である。

扨て聯合國として如何なる希望を有してゐるかといへば、曩きに獨逸が前後九回に亘りて直接間接講和の申込みをやつたことがあつたが、それには殆んど耳を藉すものすらなかつたのみならず、其當の獨逸ですら之を本氣に申込むだとは受取られなかつた。然るに昨年十二月十二日獨逸の中立諸國を介して講和の提議をなせしは、從來とは異つて大そう大ビラであつた。過去二年半以前昂々然として全世界に向つて宣戰を布告したると正反對に今度は自ら平和の使徒を以て任ずる意氣込を示して來た。其條件に曰く

一、白耳義の還附
二、佛國に於ける占領地の還附
三、波蘭及リトニア兩王國の新設
四、塞維を墺匈國に屬せしむること
五、勃牙利が第二巴爾幹戰に於て喪ひたる地域を恢復すること
六、獨逸は阿弗利加極東其他の植民地を還附せらるゝ事
七、アドリアチック海附近の伊太利占領地を墺國に還附すること
八、君府は依然土耳古に屬す可きこと

此等の條件を以て獨逸の講和に對する希望が果して眞意に出でたるや、また軍に聯合國の背踏であるか、或はそれとも對內策に利用したかに就ては俄かに之を判斷するを許さないが、この講和條件を第三者の立場から見て、現在の戰局圖を參考として研究したならば大體に於て獨逸の要求は當を得て居るといはねばならぬ。而して此等の條件に就ては別段に之を說明するを要しないまで明かな事である、即ち白耳義の還附以下六項に亘ることは獨逸今日の戰功によればいへない

こと　なささうである。唯我輩が不審に堪へないのはアルサス、ローレンの問題である、アルサス、ローレンの恢復は佛蘭西にとつては、現戰爭の目的ともいふ可き重要なる問題であるに拘らず、獨逸は此に對して一言の說明をも與へて居らぬのを見れば、或は此の重大事項を殘して置いて講和談判の色艶とし、また懸引をする根膽ではあるまいか。元來アルサス、ローレンは其人口の三分の二は獨逸種族である所からビスマルクも此を獨逸化するは獨逸にとつて最も容易なことなるのみならず、獨逸の防備としては極めて便利な所であると睨んで之を取つたのであるが、結果は不幸にして反對の傾向を示した。明かに曰へば今日の獨逸としては有つても無くてもさまで關係のない所であるから、場合によつては之れを佛蘭西に返した所が別に利益問題からいふと不利益でない所である。或は大戰の成行如何に因つては獨逸は此土地位は投げ出す覺悟であるかも知れぬ。

先づ歐洲地方の講和問題としては我帝國に直接關係がないから、之は評論しないが、第六項に當る「植民地還附云々」の件に付ては、大に我帝國と關係のあることだから之を詳述することにしやう。

我が占領地帶の處分法

◎南洋諸島の處分

一　永久的占領の主張

我が帝國は現に占領しつゝある南洋諸島を如何に處分すべきか。是れは極めて重大な問題であるが、戰局の如何は此の問題の解決に向つて大影響を及ぼすことは言ふ迄もなからうと思ふ。併し日本としては這次の大戰爭に於いて、終局の勝利が聯合國に歸するとしても、その何れたるに拘はらず、日本は日本の立場より考へて其の態度を決定しなくてはならぬ。勿論夫れが爲に歐米列强を敵として迄爭ふことは不得策であるにしても、世界平和の大理想に立脚して少なくとも東洋永遠の平和を維持する點より考慮して、其の主張すべきは忌憚なく主張せねばならぬ。

南洋に於ける占領諸島は、實に日本にとりては南洋方面に向つて其の經濟的發展をなす立脚點として重要なるは勿論、其の軍事的價値に於ても極めて重大であることは、今更改めて言ふまでもないが、是れは日本が南洋方面に對する侵略的意味に於てゞなく、唯だ東洋の平和を攪亂せんとするものに對して、重要な意義を有するものと云はなければならぬ。即ち歐米列强が南洋方面

に割據して東洋に對する前進陣地を形成し、而してまた北米合衆國が比律賓に重要なる軍事的施設をなしつゝある今日に當つて、我國が少なくとも東洋永遠の平和を確保すべき使命を有する帝國が、遲れ馳せ乍らも這次大戰爭に參加して、南洋方面に一石を下すことが出來て、東洋平和の爲に必要な足溜りを得たといふものは、獨り日本の爲ばかりでなく、東洋平和の爲にも、世界平和の爲にも、誠に歡迎すべき出來事であつて、虛心坦懷是に臨むに於て、何れの國と雖も異論を挾む餘地はあるまいと思ふ。されば此の點に於て日本が戰後是等の南洋諸島を永久に占領するといふことは、戰後に現れ來るべき新形勢に適應して、東洋の平和史に是を推し弘めて言ふと、世界の平和即ち、これまで勢力均衡によつて維持せられたる平和を尙ほ將來に確保する上に於て聯合與國の承認せざる可からざる當然の主張といはなければならぬ。

二　日米衝突の禍機

我輩が持に南洋占領を永久にす可しといふのには以上之を述べた通り、今次の大戰に於ける我邦當然の功勳として、言ひ換ふれば、聯合國として對東洋を憂慮することなく大に戰ひ得るやうに東洋の地を治めてゐた功勞による當然の權利ともいふ可き理由に因つても、之を永久的に占領す可き價値は充分である。殊に第二は現在聯合國の曰つてゐるやうに獨逸を崩滅せしむる意味に於てその植民地を封鎖することが利益であるならば、一時的よりも寧ろ永久的が利益であらねばならぬので單に之をのみしても南洋は我が當然の永久占領となして差支ない理由である。而して其永久的占領の第三理由としては我東洋の平和と我國防の見地から是非共之を占領したい希望である、それは表題に掲げた通り若し現在南洋に於ける米國の勢力と東洋を根據として東洋に發展せんとする米國の方針とを考へたならば明かな事であらう。南洋が米國の東進策の根據地であることは已に之を述べたが、戰後米國が何れの方面に向けて大發展を試みるだらうか、我輩の見る所では、戰後米國が積極的に發展を試み其力を集注する方面は、南米方面にはあらずして東亞の方面であらうと思ふ。（墨西哥問題は言ふに及ばず）南米諸國に對しては、その民族の關係上より延いて米國內に於ける民族間の利害の衝突や感情の行き違ひを生じ、その結果內部の紛爭を激成せしむる動機となる恐れある故、積極的露骨の態度、行動を執ることを避くるであらうと思はれるが、此の點に就て何等の顧慮を要せないのみならず、且つ現在及將來の大市場として注目せら

れつゝある東亞方面に對しては必ずや經濟的發展を企圖するがために大々的施設をなし、全力を傾注する事は多言を要せぬことである。

勿論米國の一部識者中には、我國の國運隆盛にして日米提携の世界平和に及ぼす至大なる功果があるのを認むると同時に、日米提携がその國防及び利益の上から、非常に好都合とし考へらるゝ所から、米國はよろしく太西洋に躍進し、太平洋は萬事日本に任せよといふ穩當なる議論の行はれてゐないこともないが、斯樣なことは所謂外交的辭令としては、極めて巧妙なる言であるが、實際問題としてはなか〳〵困難なことである。否不可能な注文である。故に米國が東亞方面に發展せんとする方針に對しては日本の最も注意しなければならない所であつて、此等の點が將來即ち日米兩國間に多くの複雜なる問題を誘起する動機をなすであらう。

實に戰後に於ては英國も獨逸も暫らくの間は戰爭の創痍を癒するがために、東亞方面に於て經濟的發展を企圖することはいふまでもないことであるが、その何れも當分の內は他と衝突を豫期してまでも積極的に經營の歩を進めて來るか否かは疑問である、彼等は必ずや相犯さゞる程度に於て活動するであらう。是に反して前述せる理由の下に米國は大々的活動を試みんとするものである故、それだけ利害の衝突を見ることがあるは豫め覺悟しなくてはならぬ。併しながら斯樣な必然的な情勢の下に立ちて、日本が米國と利害の衝突なくして而かも問題を有利な方面に解決する方法は米國と交情の濃厚なるのみならず、常に米人に敬重せられ、又米國のために輕侮を招かざるだけの威力を完備して置くことであるが、これは亦なか〳〵困難なことで日本の力が極めて强大になるか、或は米國が極めて讓歩して南洋方面の軍政を悉く撤廢して聊かも野心のないことを證據立つるにあらずんば不可能のことであらう。而して此の二問題殊に後者に至つては絕對に不可能なことであるとすれば、亦日米の衝突は避け得可からざるものと豫め覺悟して置かねばならぬ。故に我輩は寧ろ進んで南洋に於ける新占領地に對しては、米國の軍備に相當するだけの設備を以て我帝國の最南の關門を堅めたいのである。

猶我帝國の新占領地としては、靑島があるがこれは無論我租借地に入る可きものであるとの一言の說明のみにて滿足だらうと信ずる。

◎我帝國の四大關門

南洋の防備

「我帝國の四大關門といへば、言はずと知れた第一は南洋より臺灣海峽まで、第二は朝鮮、第三は津輕方面、第四は太平洋である。此の四關門は彼の日露戰爭の經驗に因れば我等は先づ臺灣及南洋方面に大に門戸を堅く鎖す必要があるのみならず、米國の南洋に於ける立場に相對峙する上に於ても亦最も力を用ひなければならないのである。日米戰爭の著者として有名なホーマーリー將軍の日米戰爭一般方略によれば、先づ日本軍が南洋を占領するといふことがあるが、今日の海軍力を以て南洋を占領することよりも、來る可き米國の海軍擴張後に備ふる太平洋艦隊に備ふることすら極めて困難なことである。況んや進んで南洋を占領する等のことが到底出來やう筈はない。我輩が抑も本書を著すのは如何にして戰後の大發展乃至我利權擴張をなすかといふ問題ではなくして、如何にして第二の歐洲戰たる東洋大戰に備へ得るか、或は如何にして襲來の敵を防ぎ我國辱を享けないやうになし得るかの計企及警告である。從つて戰術を說明して攻略的の事を書くことは此際好まないことである。即ち南洋に於て大敵が表はれたとすれば如何に之に備ふる可かの問題であるのである。然るに幸にして我國は今回の大戰に因つて其第一關門たる南洋に於て占領地を得た以上は、之を永久に占領することは勿論、この第一關門を堅く鎖して敵をして其隙を窺はしむるやうのことがないやうに力めねばならぬ。而して戰前に於ける米國の東洋遠征艦隊は

戰艦二十二隻　裝甲巡洋艦五隻　巡洋艦七隻　砲艦八隻　海防艦二隻

であつた、今此を我海軍の既成艦隊に比較するに

戰艦二十隻　巡洋艦十三隻　輕巡洋艦二十隻

で左したる大差はないやうであるが、米國の海軍擴張は軈て三倍の戰鬪力を有し、また巴奈馬運河の開通は太西洋艦隊の廻航をして極めて容易ならしむるに至つたから、近き將來に於ては、米國の東洋遠征艦隊は殆んど我が四倍の海軍力となるであらう。

太平洋に於ける米國の防備と攻勢力

大平洋に於ける米國の海軍政策は、千九百七年迄は、比律賓を海軍の根據地とし、布哇を副根據地としてゐたが、比律賓は米國を距ること遠く、戰略上幾多の弱點あるを發見するに及び、主要根據地を布哇に移した。加州學童問題發生以來、太平洋沿岸の防備に全力を盡し七億萬弗の巨額を投じて巴奈馬運河を開鑿し、太西洋の主力艦隊を隨時太平洋に移動せしめ得る途を講じ、沿岸諸洲に於ては海軍根據地の改善を謀り、北方華盛頓州「プレマトン」に超弩級艦の修繕に堪へ得る一大船渠を建設し、灣口の防備を嚴にし、桑港には在來の「メーア、アイランド」船渠を擴張し「ロスアンゼルス」掩護のために「サンピードロ」に要塞を設け、又墨國々境に近き「サンヂエーゴ」に要港を設けた。其他米國の太平洋に加へたる防備は左の通りである。

（一）布哇群島は太平洋の中央に位し、各航路の衝に當り、守勢に於ては太平洋沿岸諸州の防備に任じ、攻勢の場合には東洋に對する海軍作戰の根據地である。米國は同群島中の「オアフ」島眞珠港に對し、千九百八年以銳意來軍事的施設をなし、灣口を開鑿し、灣内には海軍鎮守府を設け、尙超弩級艦を容るゝに足る乾船渠の建造中である。而して同島に於ける海軍根據地を擴張せんが爲め「ホノルゝ」並に眞珠灣口、兩側に海岸砲臺を設け、自ら稱して太平洋の「ジブラルター」と呼び、外に歩兵若干を駐屯せしめてゐる。

（二）「グアム」島は小笠原島の正南比律賓の正東に位し、布哇と比律賓の中繼地である。同島の「アプラ」灣は大艦隊を收容する事は不可能だが、又適當の軍需品補給地である。

（三）「サモア」群島　同島中米領「テユテエイラ」島の「パゴパーゴ」港には、米國海軍給炭所があつて、布哇の南方太平洋洲なる「フイジー」群島の東方に位して居る。米本土と濠洲との連絡上重要なる位置を占め、南太平洋に於ける有力なる根據地である。

（四）比律賓は米國の極東に於ける根據地で、北清事變に際して米國が機を失することなく、その軍隊を北清に派遣し得たのは、一に比律賓島があつたからである。即ち比律賓の兵力は支那本土に事變ある際に、米國の前衛部隊として第一着に派遣せらるべきものである。

比律賓の呂宋島には馬尼剌灣がある、其海域廣大にして、如何なる大艦隊も此に碇泊せしむるに足る。北方「スビグ」灣内「オロンカポー」に要港がある。馬尼剌灣口の「コレドギール」及其他の灣に島嶼並に「スビク」灣口の「グランド」島には巨萬の費用を投じ、堅固なる海岸砲臺を築設し、更らに陸上防備のために呂宋島に米國正規軍一師團人員約一萬人許駐屯してゐる。

米國の太平洋防備と攻勢とを研究するに當つて、是非共看過することの能きないのは巴奈馬運河の開通である。米國の尨大なる經濟力を以てするも、太平洋、太西洋と二つに分つて之を獨立せしむることは困難である。故に同運河開通以前に於ては、主力艦隊を太西洋に有せる米國は、國際關係の逼迫と共に太西洋艦隊の大部分を南米に迂回して、太平洋に回航せしめねばならなかつた。而かも之がためには少くとも、二箇月の日子を要し、此の間太平洋沿岸諸州を有力なる敵艦隊の砲火に曝す外なかつたのである。此に於てか米國は國防上太西洋太平洋の兩洋を連絡する捷路を必要とし「コロンビア」共和國の叛亂に乘じて巴奈馬運河一帶の地を米國に割讓せしめ、此に巴奈馬運河の開通を見たのであつた。之を要するに米國の國防攻勢計畫は、其尨大なる經濟力を背景として生れたことであるから、若し一朝事ある時には例へ何んな大艦隊でも、大陸軍でも間に合ふ譯である、實に羨ましき限りではないか。

津輕、朝鮮等に對しては、我要塞地帶に亘る所多いから、これを軍事上から詳細に說明する事は困難である、唯此の二關門が露西亞にのみ備へられてゐると思はゞ大なる誤りであるといふことだけは吾人の常に念頭に置く可きことである。

軍國主義を高唱す

◎軍國主義

一　平和の二原則

平和が鐵血の平和を欲するのは人情である。從つて戰爭を好まないのも人情である。人は曰ふ戰爭は平和を求めんがためのみと、我輩は世界が果して如何なる日にこの大理想鄕に達するであらうかを知らぬ。否退去及現在の歷史に於て我等が經驗し得たことは悉く戰爭の記錄である、若し鐵火を以て相見へざる時を平和の時代といふならば、それは寧ろ戰爭の準備時代ではあるまいかと疑はるゝやうに我等は有史以來不斷に戰つてゐるのである。

元來戰爭は利害の衝突より起り、平和は權力の制裁の下に維持せらるゝものである。少くとも我等が計算し得可き將來に於てもさうであらう。凡そ人類が平和を欲するのは敢て今日始まつたのでない、大なれ小なれ二人寄れば利害得失感情等の相違から或る種の競爭がある、競爭があつてそれが未だ極度に達しない程度のものであれば妥協も成立するが、極度を通り越した以上は破裂である。而して我等の各個人間に於て此の極度を保ち得ることすら困難なことは、何れの國に

行つても裁判所があるのでも解かることである。國民相互の衝突は法律を以て制裁し和解せしむることが出來やうが、對國家關係になれば國際法はあれども之は何等の權威あるものではないから、畢竟戰ふことになる、戰へば即ち優者勝ち劣者敗ける。吾人は平和を尊重し戰爭を嫌む點に於ては何人にも讓らない、しかし此の平和が到底求むることが能きないとすれば、吾人は與らざれば亡びんといふ具合になつて了まふ理由ではいか、我輩が軍國主義を高唱する所以亦此に存するのみである。平和か鐵血か、鐵血を以て購ふにあらずんば平和は來らずとすれば、平和の價も亦尊い哉ではないか。

しかし茲に平和を求むるの道が無いでもない、それは國を擧げて他國に服從することである。また茲に同じく平和を得るの方法がある、それは世界の絶對權力者となつて世界を統一し服從せしむることである。恐らくこの二つの原則は永久に平和の原則となるであらう。諸君前者を欲するか、後者を欲するか、前者を欲する者は今日の人間として恐らく之れ有るまい、然らば世界各國平和を叫んでゐるのは、皆世界を統一して自家絶對權力者となり號令を下さんとの希望であるか、世界に國は多い、人は多い、而かも今日の世界は昔日の世界でない、その一角に一波起らば忽ちにして世界を席捲する勢を以て進んで來るのである。一國と一國との戰爭は今後恐らくあるまい、吾人が國を護り泰山の安きに置かうと思ふならば、吾人は須らく世界統一者としての實力を有たねばならないのである。此に於てか我輩は叫びたい、世界の國旗を一にして我日章旗を以て北は北氷洋から、南は南極の端に至り、東西悉く土地のあらん限り我帝國の威風に服從せしむる程の大元氣を奮起したいのである。是眞に平和を得るの途ではあるまいか。

二　軍國主義は自衛か侵略か

我輩が軍國主義を高唱する所以のものは、勿論自衛のためである。之を唱へ之を行はなければ終に我軍を亡ぼすやうの事があるからである。よく聯合國側では「獨逸を亡ぼすのはその軍國主義を亡ぼすためだ」といつてゐる。然らば公平の見地に起つて聯合國側が軍國主義なくして樹立して居る事が出來るかといへば、之は識者を俟つまでもなく不可能なことが明であらう。云ふまでもなく英國は民本主義を以て建國せられてゐる、米國、佛國亦民主主義である。然し民本、民主の主義をのみ以て國が何の氣使ひもなく平和に獨立して行くことが出來やうと思ふのは大なる

謬見といはねはならぬ。何となれば大戰勃發後、英國も米國も國民皆兵の制度は餘儀なくされ、國防計畫は之に因て始て完全なるを得ることを證明されたからである。ドーソンの如き或は國民皆兵と國防とを軍國主義と混同す可からずと唱へてゐる人もあるが、已に國民皆兵といふ、國防といふ廣き意味に於ても、狹き意味に於ても國家は全力を擧げて兵事國防に盡してゐるからである、それは戰爭の時だからだといふかも知れないが、戰爭だつて平時だつて別に異りはない筈である。故に我輩は今次の大戰に鑑み先づ眞の國民皆兵主義を實行し、國防計畫を第一とし、之を全からしむるを標準として諸事業計畫を立てたいのである。國防成らず國亡びては產業も民福もあつたものではない。我輩が斯ういふと反對者は產業進まず、民力充實せず國防も軍備も出來ないではないかと曰ふだらう。一應尤もの事である、我輩と雖も亦之を認めないではたい。しかし今日の時勢を考へねばならぬ。若し今日の時代が平和の時代で少くとも二十年乃至三十年の平和を保ち得るとすれば、そんな緩慢なやり方も出來ない事もあるまいが、今日はそんは悠暢な時代ではない、敵は已に一晝夜にして達する西伯利亞で其爪牙を伸べてゐるではないか、また我國最近の歷史だつて平和時代といふのは僅かに十年足らずである、寧ろ是こそ戰爭の準備時代に外ならぬである。況んや我國の如く人口年々七十萬を增加し國內に於ては到底之を養ふべき富源もなく、國民にして海外に移住せんとすれば、米國と濠洲とは堅くその門戶を閉ぢ、止むなく支那本土に向はんとすれば生活程度の低き支那勞働者に苦められねばならぬ。結局人口問題解決のために南方に活路を求めねばならぬ。また經濟上の見地から、我國の對支貿易を隆盛ならしめんがためには、英國の勢力範圍にも侵略する必要がある。殊に日印貿易に於ては、英國に大壓力を加へて印度の關稅を甚しく低減せしむる必要がある。此等は悉く我が軍備の力にのみ因つて解決される問題ではないか。

それに我國防關係から、臺灣海峽の守りを以て安泰たらんとするが如きは、日露戰爭の國防觀であつて、今日の如き飛行機や潛水艇戰時代に於ては寧ろ時代錯誤である。而して南洋に國防の地點を求めんとすれば必ずや米の猜視を招くが、之を排除するのも武力に俟たなければならぬ。此等の事實は日本をして國防のためよりも侵略のために軍備を充實せしめなければならない。日本は膨脹し擴大せずして、存在する事は不可能である。從つて日本の軍備は侵略主義の目的を以て攻究せなければならない。

要するに日本は富力に於ても、兵力に於ても、非常に缺乏し不完全なる點がある。而して之を兩つながら行はないと日本の存在は極めて危險なものである。故に我輩の自衛といふは侵略の伴はねばならないことになる。換言すれば日本の軍國主義は富國强兵主義である。

三　軍國主義としての亞細亞モンロー主義

世に亞細亞主義者なるものがあつて、頻りに大亞細亞即ち亞細亞民族を結合して、歐米人の侵略に備へやうとする人がある。中にも亞細亞洲は亞細亞人の亞細亞洲なりと力むで、日支同盟を主唱する人々もあるやうだが、寔に結構な事である。然しよく考へ見れば此亦一種の空想か或は理想かのやうで何んだか現實を餘程遠ざかつしゐるかのやうにある。何故に空想のやうであり、理想のやうであるといふか、我輩は亞細亞の歷史が其將來を物語つてゐるからであると答へやう。元來亞細亞洲中國といふ國は我帝國と支那と二つである。即ち此の兩者が相結合して行くならば例の大亞細亞主義も成立し、亞細亞洲は亞細亞人の亞細亞なりともいへやうが、此兩者不幸にして共に並行線形に進んで行つてゐる、將來に於ても其距離が格別に遠かることもあるまいけれども兩者の交叉する時代は恐らく永久に來ないだらう、何故かなればそれは支那の歷史が固く保證してゐる。

元來支那が南北兩派に分れて、今にも分裂しさうにしてゐるのは、支那古代の歷史から今日に至るまで幾千年間の歷史である。それだけ支那人相互に相親まざる先天的の性質がある。例へ一時偉大なる勢力者が出で之を統一するとも或は威服せしむることが出來るかも知れないが、心服することは不可能である。而して此兩者の爭は例へ共和制であつた所で君主制であつた所で同じ事である。換言せば支那には未だ曾て統一された歷史がないが如く恐らく將來に於ても統一の時代は來らぬであらう。

假りに彼等が完全なる國家組織の能力があるとしても、最早時は遲れて了まつてゐる。彼は今次の大戰を以て最上なる好機となし頻りに露國に對つて利權の擴張を計つてゐるが、幸にして露國の利權は回收することが出來たにした所で、他の列强に對する利權の回收は覺束ないことである。列强が已に蜘蛛の巢を張つたやうにして居ては、支那が如何に活躍しても、矢張國力の相違は今日と正比例して行かねばならぬ。それも支那に對して一國の勢力なれば兎に角、斯樣に多數

が寄り集つては恐らく此の儘にしては支那の恢復は困難である。即ち我が帝國が支那の爲め努力するとしても、其權利者たる英國や佛國などが直ぐ抗議を申込むで來る、支那自身も亦場合によつては反對せぬとも限らぬ、而して彼が反對する時は何時も此等の大國によつて抗議するのである。即ち事大思想ではあるが今日の支那としては已むを得ないことである。

而かも支那は今日に於て此恢復す可き一大好時機に出會してゐる。彼が眞實自覺してゐるとすれば、正に此際大に雄飛す可しである。しかし彼は此大好機が來たや否やも知らぬやうに、例の兄弟相嚙み政爭は常に絶えない狀況で發展所か、討南軍の編成に忙はしい有樣である。凭んな具合では到底彼をして雄飛せしむることは不可能なことであらう。

支那自覺せず相變らず、例の南北を續けてゐるとすれば、若し一朝歐洲大戰終了し、彼等が大發展を企つるやうのことあらば、否必然的に來るに違いない、其時は支那は愈々分裂か、或は滅亡かであらねばなるまい、我輩は支那のため、東洋平和のため此に大亞細亞モンロー主義を宣言したい。少くとも東洋モンロー主義を實行したい、また實行するだけの實力を備へたい、東洋モンロー主義とは今日以後東洋に於ては如何なる國防問題も歐米諸國の嘴を容るゝを許さないといふ意味である。此は極めて困難のやうだが、或る方面から觀察すれば、日米宣言の如きも即ち其發端に外ないのである。更らに百尺竿頭一歩を進めて、事實に於て東洋の盟主となり以て皇國を泰山の安きに置かば、我輩の望又足れりといふ可しである。

正に此時　神の親しき囁き

我輩は殆んど其思ふ所を述べ了はつた。今稿を了へるに際して一言言ふ可き事ある。それは「正に此時」の四字である。

西洋では機會の神は頭が禿げてゐて其額の所に僅かに二本の髮があるといふ、而かも其馳するや迅速にして一度其二三本の毛髮を捉へ損ふに於ては永久に之を逸し去り不運の人として嘆かねばならぬと言はれて居る。

吾人は今千載一遇の時機に遭遇した、我が東洋に於て最も密接なる關係を有する國は英國である。而して英國は我同盟國である。我輩は從來我國の外交がこの日英同盟を中心として行はれた如く將來に於ても、益々相互の親善の度の加はらんことを希ふて止まざるものである。しかし我

輩が日英同盟謳歌者であるため、日英同盟のためなれば御無理御尤で一々其顧使に從ふ者と見る人があつたならば、それは大なる間違である。何故かなれば我輩は日英同盟の謳歌者たると同時に、大日本帝國々民の一人であるからである。若し夫れ日英同盟にして我國の不利益を釀すやうなことがあれば、我輩は先導者となりて之が破棄に大聲叱呼するに些も躊躇する者ではない。戰後世界の地圖が變化するにせよ、しないにせよ、戰前の國策と戰後の國策とは何れの國に於ても著しく異つて來るであらう。即ち我日英同盟に於ても幾多の變更す可き改良す可き條件があるに違ひない。

獨り日英同盟のみならず日佛協約も然うである、日露協約もさうである。日米の宣言も然うである。日支協約もさうであらねばならぬ、要するに此等の協約の多くは種々な意味に於て變改されやう。しかし何れにしても世界の平和と我帝國國權の擁護以外の事から出來上るならば斷じて退けねばならない。

獨逸人のフオン、バウル、ハルムスは極東に於ける强國と題して左のやうなことを言つてゐる。

「獨逸の極東を退きたる後に於ける太平洋沿岸諸國は次の如し、則ち露國及亞米利加は交通の公道たる太平洋に長き海岸線を有し、英國は植民地濠洲を以て南洋の南を扼す、而して日本は實に太平洋中最も景勝の地位を占む。其他佛は南方支那を領有すと雖も、未だ極東に於て獨立せる政策を實行する能はず、然れば當て數世紀に亘りて太西洋沿岸に行はれたるが如き大戰爭が、今後太平洋沿岸にも起る可き恐あるものとせば、先づ上記四ヶ國の間に行はるゝものと見ざる可からず。

而して此等の四國は今や戰爭中なれば極東を顧みるの遑なく、唯日本の意に任すのみ。極東に於ける日本目下の狀態は、古今未曾有有利の地位にあるものなり、則ち彼等は隨時適所に其力を集中するも、遠隔せる第三者より容喙せらるゝの憂なきなり。然りと雖も日本の無謀なる動作は何時迄も看過せらる可きものにあらず、假令之がために戰爭を惹起するの恐あるも、之を阻止せざる可からす。功名の念徒らに强く經濟の力乏しき日本をして將來吾人が攻擊し得る程度にその實力を留めしむるを要す。而して此目的を達するためには日本をして英露兩國と不和ならしむるにあり。太平洋に於ける禍亂の機は茲に存して、吾人が受けたる青島略奪の復讐も此際に行はるのなり。」

これに就ては我輩は何等の批評も好むる事なく唯讀者の判斷に任せやう。諸君獨逸は必ず復讐して來るだらう、而して彼一流の謀詐陰謀以て我親善國の間を疎隔することに力むるだらう。然り讀者は現代の外交が悉く打算的外交であることを知らねばならぬ。この打算的の國際間に於て獨り聖人君子を以て任じ、友邦に對する義理許りを考へて居つたならば、(それも友邦が此方の意を諒するなら可いが)所謂尾生の信となり了はりはせまいか。我輩は今回の歐洲大戰が世界を再造せんとする神の意に出でたるや否やは知らぬが、我が大和民族に對して神の親しき囁きがあるやうに思はれてならぬ。興國か滅亡か、吾人は與らざれば亡びん、而も今日は千載一遇の時である。實に正に此時我國民は神の親しき囁きを何と聞くか。

帝國の危機　大戰來　終

大正七年七月廿八日印刷
大正七年八月一日發行

著者　野中春洋　東京市京橋區南八丁堀一丁目一番地
發行者　小西榮三郎　東京市京橋區南小田原町二丁目十六番地　合資會社小西書店代表社員
印刷者　金津三之助　東京市京橋區南小田原町二丁目十六番地
印刷所　合資會社小西書店印刷部　東京市京橋區南八丁堀一丁目一番地

定價金壹圓六拾錢

發行所　電話京橋二二〇三番　振替東京四二一四六番　合資會社　小西書店

版權所有

（最新刊）

列強名士大舌戰

尾崎行雄序
野中春洋編

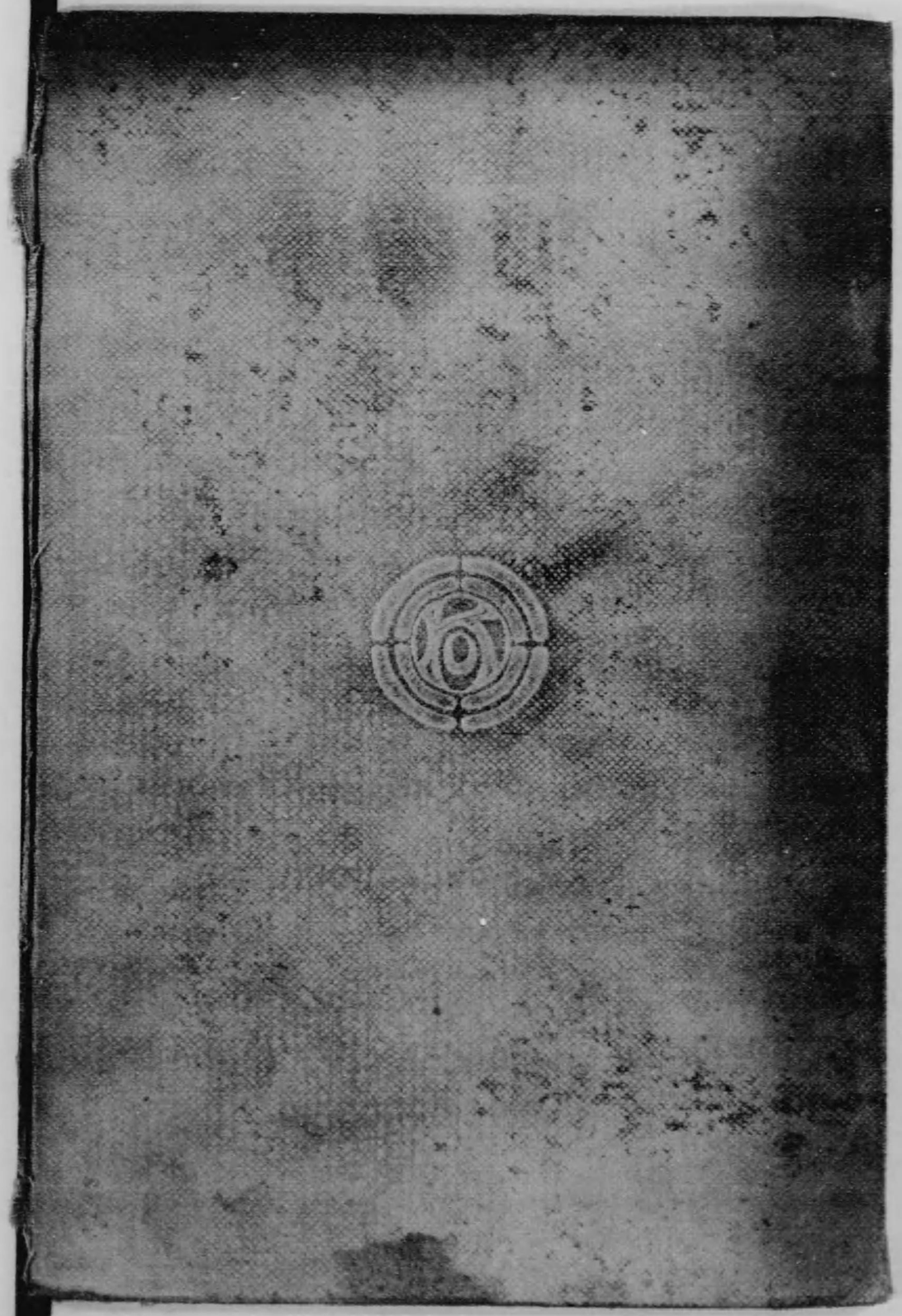
這般の大動亂は各方面を通じての大變革なり戰後に生る可きものは凡て是れ新しき世界ならざる可らず此新世界に處せんと欲するの士は必らず本書を讀め

總ロース函入三百餘頁
定價金壹圓五拾錢
送料拾錢

吾等は何故に戰はざる可らざる乎

■戰爭は武人のみの獨占す可きものでない又現代の戰爭は利害の打算のみでは出來ぬ戰爭には必らず先づ國民を首肯せしめ世界萬國に表明さる可き高遠なる戰爭目的がなければならぬ■本書は即ち這般の動亂が勃發して以來今日に到る迄の間に於て歐米列强各交戰國の首政治家學者等が世界に發表したる種々目的に關する演說を蒐集編纂したる大舌戰錄であつて眞に光彩陸離千載不朽の大文字である■故に政治家にして本書を讀まざれば以て現代の政治を談ずる事が出來ぬ軍人にして本書を讀まざれば以て國を誤るであらう教育家にして本書を讀まざれば以て子弟を托するに足らぬ實業家にしてまざれば以て■後の商策を誤るであらう其他凡ての人が本書を繙かざれば現代に處するの方術を過つに相違ない■又本書は雄辯學の好資料である故に苟くも辯舌を練るの必要ある人達の目逃す可らざる良參考書である。

發行所
東京京橋南八丁堀一の一
振替東京四二一四六番
合資會社 小西書店
電話京橋二二〇三

376
180

終